# 和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

－ 平成18年度（2006年度） －

2009

財団法人　和歌山市都市整備公社

# 序　文

本書は、財団法人和歌山市都市整備公社が平成18年度（2006年度）に行った和歌山市内の遺跡発掘調査の概要をまとめたものです。

調査の結果、川辺遺跡において縄文時代及び古墳時代から鎌倉時代までの生活の痕跡を見つけました。縄文時代晩期では、円形土坑、方形土坑、ピット、古墳時代では前期の竪穴住居、前期から後期末の溝や土坑、6世紀末から7世紀初頭の井戸などを検出しました。また平安時代の溝、鎌倉時代の土坑など多くの遺構・遺物を確認しました。

以上、調査による新たな調査成果は、郷土の歴史を語る上でなくてはならない重要な視点を与えることになりました。本書が私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

発掘調査にあたって御協力をいただいた地元の皆様及び本書編集にあたり種々の御教示を賜りました方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年（2009年）3月19日

財団法人　和歌山市都市整備公社

理事長　武　内　　功

# 例　言

1．本書は、平成 18 年度（2006 年度）に財団法人和歌山市都市整備公社が実施した和歌山市内における埋蔵文化財発掘調査事業の概要を掲載する。

2．本書に掲載の調査については、既に報告書が刊行されたものもある。未完のものについては報告書が刊行された際に、その報告をもって正式報告とする。

3．本書の執筆については、執筆分担の文責を文末に記載し、編集は奥村 薫が行った。

4．埋蔵文化財発掘調査及び本年報作成を行った担当者は以下の通りである。

埋蔵文化財発掘調査

【平成 18 年度（2006 年度】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局　埋蔵文化財班

班　長（学芸員）　北野隆亮

主　任（学芸員）　井馬好英

主　任（学芸員）　奥村　薫

主　任（学芸員）　藤藪勝則

年報作成

【平成 20 年度（2008 年度）】

財団法人和歌山市都市整備公社

事務局　埋蔵文化財班

班　長（学芸員）　北野隆亮

主　査（学芸員）　井馬好英

主　任（学芸員）　奥村　薫

主　任（学芸員）　藤藪勝則

# 本　文　目　次

Ⅰ．はじめに

平成18年度（2006年度）の調査 …… 1

Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

1．川辺遺跡第2・3次調査 …… 2

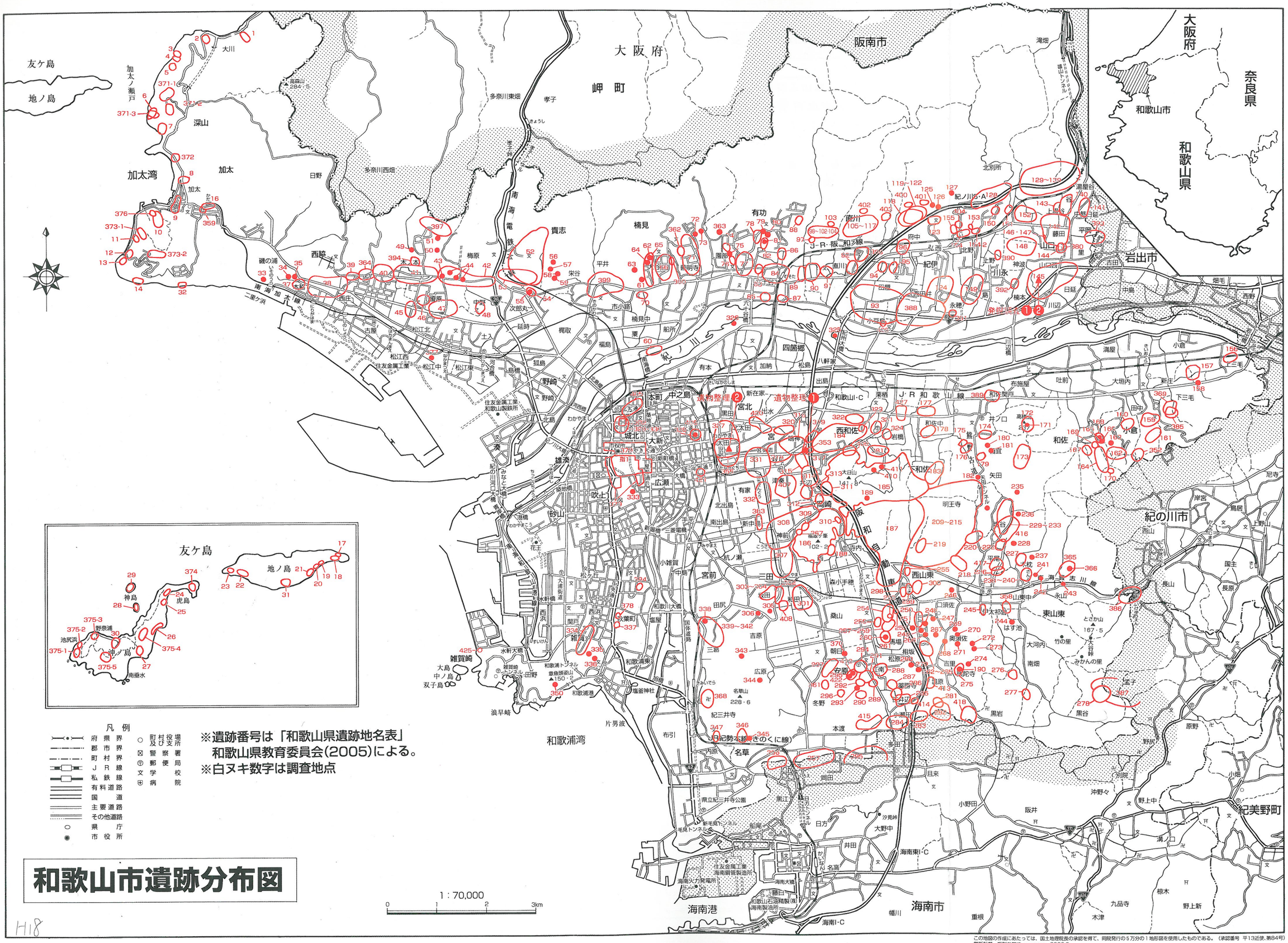
2．川辺遺跡第4・5次調査 …… 6

Ⅲ．遺物整理報告等

1．和歌山市鳴神貝塚（鳴神Ⅳ遺跡 第10次調査）出土の人骨 ……10

2．太田・黒田遺跡 第22次調査遺物整理 ……21

Ⅳ．普及啓発活動……35




# 和歌山市遺跡分布図

H18

この地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を使用したものである。（承認番号 平13近使、第84号）
無断転載・複製を禁ず <中央印刷株式> 2002.3

# 和歌山市遺跡地名表（「和歌山県遺跡地名表」和歌山県教育委員会＜2005年＞より作成。）H18

| 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 | 遺跡番号 | 名称 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 報恩講寺遺跡 | 49 | 城山古墳 | 105～117 | 直川八幡山古墳群 | 174 | 禰宜Ⅰ遺跡 | 261 | 馬場遺跡 | 310 | 森小手穂埴輪窯跡 | 362 | 鳴滝遺跡 | 398 | 府中Ⅳ遺跡 |
| 2 | 大川西方遺跡 | 50 | 権現山1号墳 | 118 | 八王寺山古墳群 | 175 | 禰宜Ⅱ遺跡 | 262～265 | 東池古墳群 | 311 | 大日山Ⅰ遺跡 | 363 | 園部円山古墳 | 399 | 平井遺跡 |
| 3 | 藻江遺跡 | 51 | 権現山2号墳 | 119 | 橘谷Ⅰ遺跡 | 176 | 禰宜貝塚 | 266 | 吉里銅鐸出土地 | 312 | 井辺Ⅰ遺跡 | 364 | 西庄Ⅱ遺跡 | 400 | 深谷池北遺跡 |
| 4 | しょうぶ谷遺跡 | 52 | 高芝遺跡 | 120 | 橘谷Ⅱ遺跡 | 177 | 河南中学校北方遺跡 | 267 | 小山古墳 | 313 | 井辺Ⅱ遺跡 | 365 | 永山遺跡 | 401 | 名草池北遺跡 |
| 5 | 水谷遺跡 | 53 | 高芝古墳群 | 121 | 橘谷Ⅲ遺跡 | 178 | 和佐中遺跡 | 268 | 奥須佐窯跡 | 314 | 鳴神Ⅱ遺跡 | 366 | 永山古墳 | 402 | 湯谷池西遺跡 |
| 6 | 男良の谷遺跡 | 54 | 栄谷貝塚 | 122 | 橘谷銅鐸出土地 | 179 | 和佐寺跡 | 269 | 円満寺古墳 | 315 | 鳴神Ⅲ遺跡 | 367 | 井辺Ⅲ遺跡 | 403 | 平野池南遺跡 |
| 7 | 深山遺跡 | 55 | 貴志古墳 | 123 | 弘西遺跡 | 180・181 | 禰宜古墳群 | 270 | 峯古墳 | 316 | 鳴神Ⅳ遺跡 | 368 | 紀三井寺遺跡 | 404 | 北野池北遺跡 |
| 8 | 大谷川遺跡 | 56 | 川原崎遺跡 | 124 | 北田井遺跡 | 182 | 和坂古墳 | 271 | 西光寺窯地 | 317 | 鳴神貝塚 | 369 | 奥山田遺跡 | 405 | 山吹丁遺跡 |
| 9 | 加太遺跡 | 57～59 | 川原崎古墳群 | 125～127 | 別所古墳群 | 183 | 和佐古墳群 | 272 | 吉里1号窯跡 | 318 | 鳴神Ⅴ遺跡 | 370 | 朝日石槍出土地 | 406 | 友田町遺跡 |
| 10 | 加太南遺跡 | 60 | 国有本遺跡 | 128 | 上野古墳群 | 184 | 花山古墳群 | 273 | 吉里2号窯跡 | 319 | 音浦遺跡 | 371 | 深山要塞跡 | 407 | 津湊Ⅱ遺跡 |
| 11 | 平の谷遺跡 | 61 | 大谷古墳 | 129～139 | 山口古墳群 | 185 | 岩橋千塚古墳群 | 274 | 頭陀寺古墳 | 320 | 鳴神Ⅵ遺跡 | 371－1 | 深山第1砲台跡 | 408 | 和田Ⅱ遺跡 |
| 12 | 田倉崎Ⅰ遺跡 | 62･64･65 | 晒山古墳群 | 140 | 山口廃寺跡 | 186 | 井辺前山古墳群 | 275 | 頭陀寺遺跡 | 321 | 岩橋遺跡 | 371－2 | 深山第2砲台跡 | 409 | 岩橋Ⅲ遺跡 |
| 13 | 田倉崎Ⅱ遺跡 | 63 | 慶円寺裏山古墳 | 141 | 中筋日延遺跡 | 187 | 寺内古墳群 | 276 | 大将軍窯跡 | 322 | 栗栖Ⅰ遺跡 | 371～3 | 男良砲台跡 | 410 | 前山B226号墳 |
| 14 | 船出遺跡 | 66 | 雨が谷古墳群 | 142 | 山口遺跡 | 188 | 森小手穂遺跡 | 277 | 有ノ木窯跡 | 323 | 栗栖Ⅱ遺跡 | 372 | 加太砲台跡 | 411 | 前山B227号墳 |
| 14 | 加太駅北方遺跡 | 70 | 楠見遺跡 | 143 | 谷遺跡 | 189 | 寺内ナイフ形石器出土地 | 278 | 宝光寺跡 | 324 | 高橋神社遺跡 | 373－1･2 | 田倉崎砲台跡 | 412 | 城ノ前1号墳 |
| 17 | 藻崎北浜遺跡 | 71 | 鳴滝古墳群 | 144 | 里遺跡 | 190 | 頭陀寺ナイフ形石器出土地 | 279・280 | 松原古墳群 | 325 | 紀の川銅鐸出土地 | 374 | 虎島砲台跡 | 413 | 境原遺跡 |
| 18 | 藻崎南浜遺跡 | 72 | 奥出古墳 | 145 | 川辺遺跡 | 209～215 | 山東古墳群 | 281 | 滝ヶ峯古墳群 | 326 | 有本銅鐸出土地 | 375 | 友ヶ島要塞跡 | 414 | 薬勝寺Ⅱ遺跡 |
| 19 | 藻崎西方遺跡 | 73 | 有功経塚 | 146 | 藤田古墳 | 218 | 若林古墳群 | 282 | 滝ヶ峯遺跡 | 327 | 太田・黒田遺跡 | 375－1 | 友ヶ島第1砲台跡 | 415 | 本渡遺跡 |
| 20 | 神前東浜遺跡 | 74 | 園部Ⅰ遺跡 | 147 | 硲古墳 | 219 | 吉礼砂羅谷窯跡 | 283 | 薬勝寺南山古墳群 | 328 | 吉田窯跡 | 375－2 | 友ヶ島第2砲台跡 | 416 | 明王寺遺跡 |
| 21 | 神前西浜遺跡 | 75 | 園部古墳 | 148 | 藤田遺跡 | 220～222 | 平尾古墳群 | 284 | 仁井辺遺跡 | 329 | 鷺ノ森遺跡 | 375－3 | 友ヶ島第3砲台跡 | 417 | 平尾遺跡 |
| 22 | 屋敷浜遺跡 | 76 | 園部Ⅱ遺跡 | 149 | 宇田森遺跡 | 226 | 楠古墳群 | 285 | 薬勝寺跡 | 330 | 鷺ノ森窯跡 | 375－4 | 友ヶ島第4砲台跡 | 418 | 滝ヶ峯Ⅱ遺跡 |
| 23 | おそ越の鼻遺跡 | 77 | 有功遺跡 | 150 | 上野廃寺跡(紀伊薬師寺跡) | 227 | 足守神社古墳群 | 286 | 薬勝寺遺跡 | 331 | 秋月遺跡 | 375－5 | 友ヶ島第5砲台跡 | 420 | 太田城水攻め堤跡 |
| 24 | 一色谷遺跡 | 78 | 池田遺跡 | 151 | 上野遺跡 | 228 | 赤山古墳 | 287 | 松原Ⅰ遺跡 | 332 | 津湊遺跡 | 376 | 行者堂東遺跡 | 421 | 木広町遺跡 |
| 25 | 柏の浜遺跡 | 79 | 有功古墳 | 152 | 上黒谷遺跡 | 229～233 | 塩谷古墳群 | 288 | 松原Ⅱ遺跡 | 333 | 岡の里遺跡 | 377 | 松江経塚 | 422 | 朝日蔵骨器出土地 |
| 26 | 深蛇池遺跡 | 80 | 大同寺墳墓 | 153 | 北野窯跡 | 234 | 新出古墳 | 289 | 薬師谷遺跡 | 334 | 関戸遺跡 | 378 | 猊口石岩陰遺跡 | 423 | 上黒谷Ⅱ遺跡 |
| 27 | 垂水遺跡 | 81 | 大同寺古墳 | 154 | 北野遺跡 | 235 | 明王寺経塚 | 290 | 江南遺跡 | 335 | 関戸古墳 | 379 | 和歌山城跡 | 424 | 東田中遺跡 |
| 28 | 神島遺跡 | 82 | 大同寺遺跡 | 154－2 | 北野Ⅱ遺跡 | 236 | 矢田古墳 | 291 | 曽垣田遺跡 | 336 | 天神山古墳 | 380 | 山口御殿跡 | 425 | 雑賀崎台場跡 |
| 29 | 沖の島北方海底遺跡 | 83 | 法然寺遺跡 | 155 | 若宮池遺跡 | 237 | 北池古墳 | 292 | 曽垣田Ⅱ遺跡 | 337 | 秋葉山貝塚 | 381 | 岩橋Ⅱ遺跡 | 426 | 小豆島西遺跡 |
| 30 | 野奈浦遺跡 | 84 | 六十谷遺跡 | 156 | 上三毛遺跡 | 238～240 | 殿山古墳群 | 293 | 曽垣田古墳 | 338 | アンドの鼻古墳 | 382 | 本願寺跡 | 427 | 岩橋高柳遺跡 |
| 31 | ハイブの浦遺跡 | 85 | 和田遺跡 | 157 | 下三毛遺跡 | 241 | 土井山古墳 | 294 | 城の前Ⅱ遺跡 | 339～342 | 三田古墳群 | 383 | 神前Ⅱ遺跡 | 428 | 和坂南垣内古墳群 |
| 32 | 浜遺跡 | 86 | 西辻遺跡 | 158 | 小山古墳 | 242 | 丸山古墳 | 295 | 城の前Ⅰ遺跡 | 343 | 吉原古墳 | 384 | 高松焼窯跡 | 指1 | 史跡和歌山城 |
| 33～35 | 磯の浦古墳群 | 87 | 川口遺跡 | 159 | 寺山古墳群 | 243 | 高岡古墳 | 296 | 大池遺跡 | 344 | 広原古墳 | 385 | 奥山田古墳群 | | |
| 37 | 磯脇遺跡 | 88 | 六十谷古墳群 | 160 | 東国山古墳群 | 244 | 桜山古墳 | 297 | 赤津古墳群 | 345 | 内原古墳 | 386 | 大池遺跡 | | |
| 38 | 西庄遺跡 | 89 | 直川遺跡 | 161 | 宮山古墳群 | 245 | 伊太祈曽神社古墳群 | 298 | 吉礼貝塚 | 346 | 内原遺跡 | 387 | 大旗山城跡 | | |
| 39 | 平の下遺跡 | 90 | 直川廃寺跡(明光寺跡) | 162・163 | 小倉古墳群 | 246 | チショ古墳 | 299 | 西吉礼遺跡 | 347 | 名草貝塚 | 388 | 西田井遺跡 | | |
| 40 | 木ノ本Ⅰ遺跡 | 91 | 高井遺跡 | 164 | 明楽古墳群 | 247～249 | 城ヶ森古墳群 | 300 | 東吉礼遺跡 | 350 | 高津子山古墳 | 389 | 井ノ口遺跡 | | |
| 41 | 木ノ本Ⅱ遺跡 | 92 | 鳥井遺跡 | 165・166 | 小倉神社古墳群 | 250 | 城ヶ森遺跡 | 301 | 和田遺跡 | 352 | 金谷廃寺跡 | 390 | 神波遺跡 | | |
| 42 | 木ノ本Ⅲ遺跡 | 93 | 田屋遺跡 | 167 | モント古墳群 | 251 | 相坂古墳 | 302 | 和田岩坪遺跡 | 353 | 興徳寺跡 | 391 | 永穂遺跡 | | |
| 43 | 木ノ本経塚 | 94 | 府中Ⅱ遺跡 | 168 | 小倉神社境内遺跡 | 252・253 | 千石山古墳群 | 303･304 | 和田古墳群 | 356 | 太田城跡 | 392 | 楠本遺跡 | | |
| 44 | 釜山古墳群 | 95 | 府中Ⅲ遺跡 | 169 | 金谷遺跡 | 254 | 菖蒲谷遺跡 | 305 | 竈山神社古墳 | 357 | 山崎山古墳群 | 393 | 吉田遺跡 | | |
| 45 | 木本小学校Ⅰ遺跡 | 96 | 府中遺跡 | 170 | 奥池遺跡 | 255 | 吉礼Ⅲ遺跡 | 306 | 坂田地蔵山古墳 | 358 | 山東中遺跡 | 394 | 城山遺跡 | | |
| 46 | 木ノ本小学校Ⅱ遺跡 | 97 | 北山Ⅰ遺跡 | 171 | 高積山遺跡 | 256 | 千石山遺跡 | 307 | 神前遺跡 | 359 | 加太Ⅱ遺跡 | 395 | 岡村遺跡 | | |
| 47 | 榎原遺跡 | 98～102･104 | 北山古墳群 | 172 | 薬徳寺跡 | 257～259 | 井戸古墳群 | 308 | 井辺遺跡 | 360 | 雨が谷遺跡 | 396 | 室山古墳群 | | |
| 48 | 中野遺跡 | 103 | 北山Ⅱ遺跡 | 173 | 城ヶ峯城跡 | 260 | 馬場古墳群 | 309 | 岡崎縄文遺跡 | 361 | 冬野遺跡 | 397 | 木ノ本Ⅳ遺跡 | | |

# Ⅰ．はじめに

## 平成 18 年度（2006 年度）の調査

和歌山市における平成 18 年度（2006 年度）の財団法人和歌山市都市整備公社の発掘調査受託事業は４件である。

調査に至った原因としては、大規模店舗建設が川辺遺跡において計画されたことから、遺跡範囲内における確認調査を分割して２件（第 2・3 次調査）実施し、その結果、開発される範囲内において民間受託を２件（第４・5 次調査）実施したものである。

これらの調査で、いくつかの重要な成果が得られているので以下にまとめることとする。

**縄文時代**

縄文時代については、川辺遺跡第５次調査で縄文時代晩期の円形土坑、方形土坑、ピットなど多くの遺構・遺物を確認した。

**古墳時代**

第２次調査では、古墳時代前期から後期末の溝や土坑、後期以降の土坑、第３次調査において、古墳時代初頭の溝や円形住居、前期の方形住居、土坑、柱穴などを確認することができた。この他第４次調査では、6 世紀末から 7 世紀初頭の井戸などを確認した。

**平安時代**

第２次調査において、溝などを確認した。

**鎌倉時代**

第４次調査においては、後期の土葬墓を検出し、土師器皿、瓦器椀、石灰岩系の砥石、鉄製小刀、北宋銭６枚が副葬品として出土した。

**江戸時代**

第２・3 次調査では、耕作に伴う小溝を検出した。

【2006 年度調査一覧表】

| 番号 | 調　査　名 | 原　　因 | 調査期間 | 面積（㎡） | 調　　査　　概　　要 | 担当者名 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 川辺遺跡第２次調査 | 店舗建設に伴う大規模開発 | 2006.8 ～ 9 | 175.5 | 古墳時代前期から後期末の溝や土坑、後期以降の土坑、平安時代の溝などを検出。 | 藤薮 |
| 2 | 川辺遺跡第３次調査 | 店舗建設に伴う大規模開発 | 2006.11 ～ 12 | 132.8 | 古墳時代の溝や土坑、柱穴の他、鎌倉時代の土坑などを検出。 | 藤薮 |
| 3 | 川辺遺跡第４次調査 | 大規模開発に伴う | 2006.12 ～ 2007.3 | 977.8 | 古墳時代初頭、前期の竪穴住居、6 世紀末から 7 世紀初頭の井戸などを検出。 | 井馬・藤薮 |
| 4 | 川辺遺跡第５次調査 | 大規模開発に伴う | 2007.2 ～ 3 | 135.6 | 縄文時代晩期の円形土坑、方形土坑、ピットなどを検出した。 | 井馬・藤薮 |

# Ⅱ．埋蔵文化財の発掘調査概要

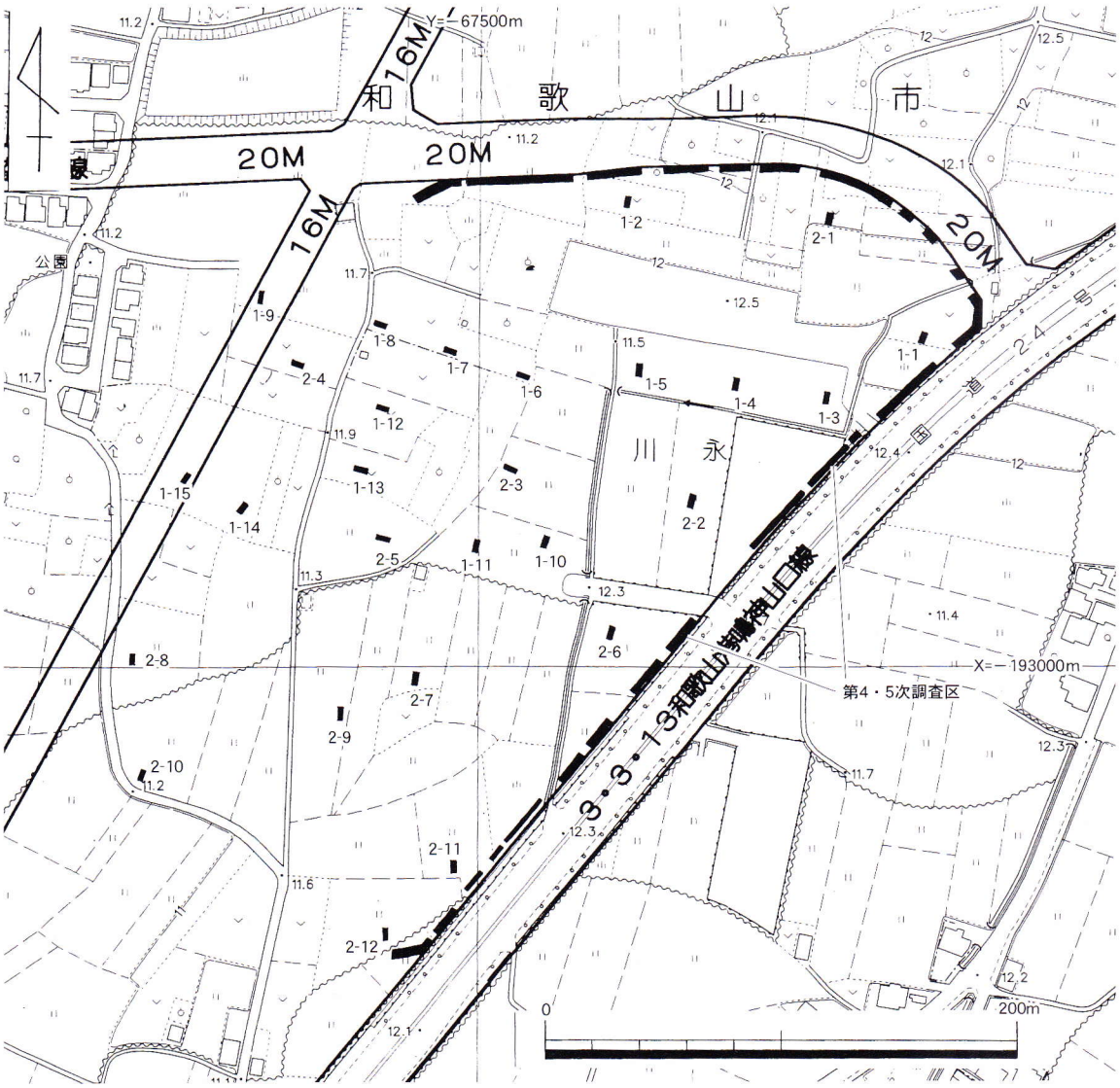
## １．川辺遺跡 第２・３次確認調査

調 査 地　和歌山市里・川辺・藤田地内
調査面積　第２次確認調査　175.5 ㎡、第３次確認調査　132.8 ㎡

### 位置と環境

和歌山市域の東端部にあたる川辺遺跡は、紀ノ川の河口から約 12 ㎞上流の北岸に位置し、東西約１㎞、南北約 650 ｍの範囲に広がる縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡である。

当遺跡における過去の調査には、昭和 62・63 年度及び平成３・４年度に財団法人和歌山県文化財センターが行った一般国道 24 号バイパス建設に伴う事前調査（調査面積 30,641 ㎡）及び、平成９・12･13 年度に行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査（調査面積約 7,400 ㎡）がある。また、平成 13 年度には財団法人和歌山市文化体育振興事業団が遺跡の実態解明を目的とした発掘調査（調査面積 192 ㎡）を実施している。県センターが実施したバイパス関連の調査では、縄文時代




調査区位置図（数字番号は第２・３次調査地区番号を示す。）

晩期の土器棺墓や弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代から飛鳥時代にかけての竪穴住居や掘立柱建物などを検出した他、遮光器土偶などを含む多量の遺物が出土している。貝塚線関連の調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居及び、古墳時代後期末から飛鳥時代の竪穴住居や掘立柱建物の他、中世の掘立柱建物や土坑墓などが検出されている。また市事業団の調査では弥生時代中期の松菊里式竪穴住居などが見つかっている。

今回の調査は、『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記された川辺遺跡（遺跡番号145）の範囲内において店舗建設に伴う大規模開発を起因とし、遺跡確認の目的で実施した。

**調査内容**

調査は、開発計画範囲約70,000㎡を対象に2×5m四方の調査区を、第2次確認調査では1-1～15区までの15ヶ所、第3次確認調査では2-1～12区までの12ヶ所、合計27ヶ所設定して実施した。

調査地の基本層序は、調査対象地の北部及び北西部と東部及び南部とではその様相が大きく異なるため、土質・土色及び包含される遺物の時期や遺構検出面の対応関係を考慮し、第1～7層に分層した。第1層は現代の耕作土であり、第2層は江戸時代の耕作土と考えられる灰黄色系の粗砂混シルトである。また第3層は室町時代から江戸時代にかけての耕作土と考えられるにぶい黄色系の粗砂混シルトである。次に第4層は、鎌倉時代の耕作土と考えられるにぶい黄色系の粗砂混シルトで、黒褐色の鉄分粒を多量に含むことを特徴とする。第5層は奈良時代から平安時代にかけての水田耕作土と考えられるものである。この第5層は、調査地の東部及び南部に設定した1-3～5・10区・2-2・3・6～12区においてのみ確認できるもので、そのうち第5a・b層は平安時代の耕作土と考えられる灰黄色系の粘土混シルトである。また第5c・d層は、黄褐色系の細砂混シルトであり、2-6～11区の調査地南部においてのみ確認できるもので、奈良時代から平安時代にかけての耕作土と考えられる。第6層は、古墳時代以前に紀ノ川の沖積作用などによって堆積したと考えられるもので、褐色または黄褐色系のシルトであり2～4単位に細分が可能である。最後に第7層は、調査地の北部から北西部（1-2・11～15区・2-1・3・4・5・8区）において堆積する1～3㎝大の円礫を多量に含む褐色系の砂礫層である。これら第6・7層については、第6a・b層においてごく少量の遺物が含まれるものの、その他の第6層及び第7層では遺物を確認することができなかった。

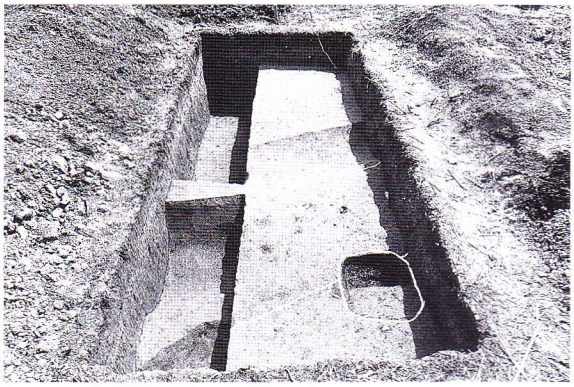


写真1　1-1区全景（北から）

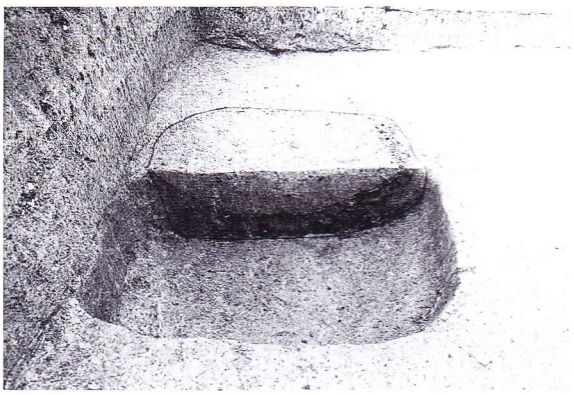


写真2　1-1区 土坑3土層堆積状況（南から）

(1) 第2次確認調査検出の遺構

第2次確認調査では、第6層上面において古墳時代前期から後期末の溝や土坑の他、後期以降の土坑、平安時代のものとみられる溝を検出した。また第4

層上面では中世の耕作に伴う小溝、第２・３層上面では江戸時代の耕作に伴う小溝を検出した。
以下、主な調査区について説明する。

１-１区では、第６層上面において古墳時代前期の溝１条、後期の溝１条、後期以降の土坑１基（土坑３）、平安時代のものとみられる溝１条を検出した（写真１）。このうち土坑３は、遺構底面に炭と焼土が堆積する平面方形の焼土坑である（写真２）。

１-13区では、第６層上面において古墳時代後期末から飛鳥時代の溝１条（溝２）を検出した（写真３）。溝２は調査区の東半部において検出したもので、その主軸はほぼ東西方向である。遺構覆土は３単位に分層が可能であり、第１層から古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての土器が多数出土した。

⑵ 第３次確認調査検出の遺構

第３次確認調査では、第６層上面において古墳時代の溝及び土坑や柱穴の他、調査地の北部に位置する２-１区では鎌倉時代の不定形な土坑などを検出した（写真４）。また第５ｃ・ｄ層上面では平安時代の溝及びピットなどを検出した。さらに第４層上面では中世の耕作に伴う小溝を検出した他、第２・３層上面において江戸時代の耕作に伴う小溝を検出した。以下、主な調査区について説明する。

２-７区では、第６層上面において古墳時代のものと考えられる溝１条及び土坑１基の他、杭穴８基を検出した（写真５）。

２-８区では、第６層上面において古墳時代のものとみられるピット10基の他、杭穴 8基を検出した（写真６）。また調査区の北及び東壁面の観察において、第５ｃ層上面から掘削されたピットや浅い落ち込みを確認した。古墳時代のものとみられるピット10基のなかには、平面形が円形または隅丸方形を呈し、柱痕を確認したことから古墳時代の掘立柱建物を構成する柱穴とみられるものがある。

２-９区では、第５ｃ層上面において平安時代のものと考えられる溝１条（溝３）及びピット９基の他、杭穴２基を検出した（写真７）。また調査区東壁面の

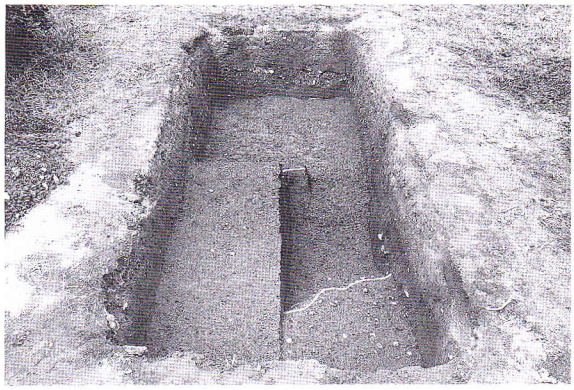


写真３　１-13区全景（東から）

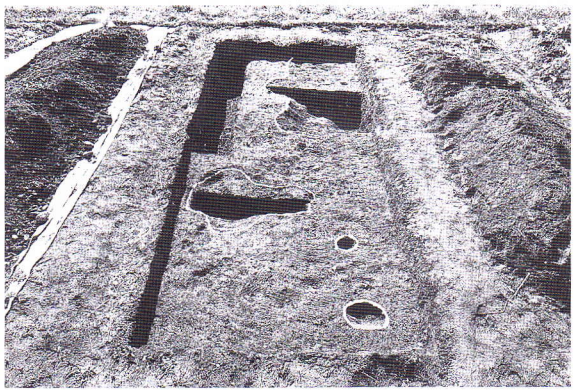


写真４　２-１区全景（北から）

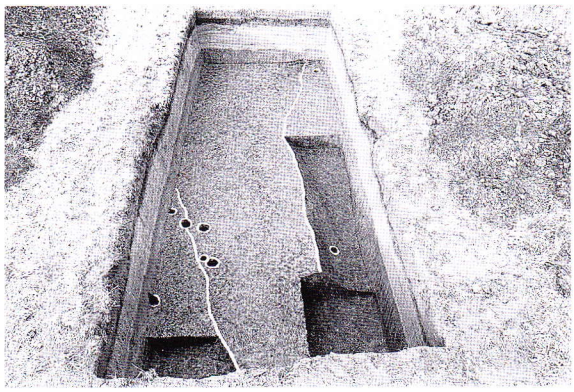


写真５　２-７区全景（南から）

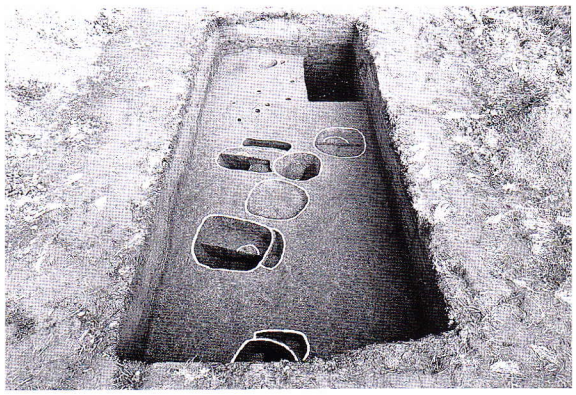


写真６　２-８区全景（南から）

観察において、第５ｄ層上面から掘削された落ち込みを確認した。このうち溝３は、調査区の北端部において検出したもので、その主軸は北東から南西方向である。この溝は南側斜面が２段に落ち込む断面形状であり、その平坦面においてピット３基を検出した。遺構覆土は３単位に分層が可能であり、最下層である第３層は薄く堆積した炭層である（写真８）。

２-11区では第６層上面において、古墳時代の溝１条（溝４）の他、杭穴２基を検出した（写真９）。

溝４は、調査区の北半部において南側肩部を検出したもので、その主軸はほぼ東西方向である。遺構覆土は４単位に分層が可能である。

２-12区では第６層上面において、古墳時代のものと考えられる溝２条の他、杭穴４基を検出した（写真10）。また調査区の南半部では噴砂に伴う砂脈を検出した。この噴砂に伴う砂脈は、調査区の南部をほぼ東西方向に延びるもので、土層堆積状況から平安時代以前に起こった地震に伴うものと考えられる。

第２・３次確認調査で出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世須恵器、中世土師器、中世陶器、輸入陶磁器、近世土師器、近世瀬戸美濃陶磁器、肥前陶磁器、瓦、土製品、石器、金属器などがある。その出土総量は第２次確認調査が遺物収納コンテナに３箱、第３次確認調査が２箱を数える。

## まとめ

今回の第２・３次確認調査では、調査対象地の北部及び北東部の他、西部において居住に関わる柱穴や土坑などを検出したものの、南西部では溝やピットのみで居住域を示す遺構は確認できなかった。

また土層堆積状況から、調査地の北部及び北西部は砂礫（第７層）による微高地であり、南部及び南西部はシルト（第６層）が堆積する微低地であることが明らかとなった。今回の調査は、小規模な調査区による確認調査であったものの、遺跡内部の広大は範囲の情報を得ることができた。　　（藤薮勝則）

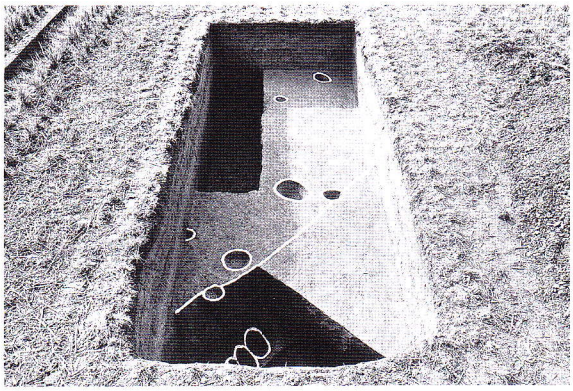


写真７　２－９区全景（北から）

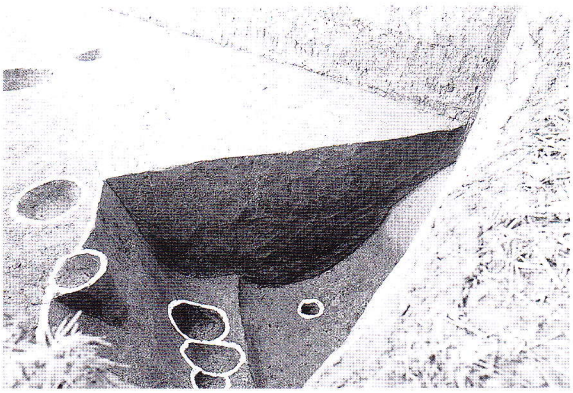


写真８　２－９区 溝３土層堆積状況（北東から）

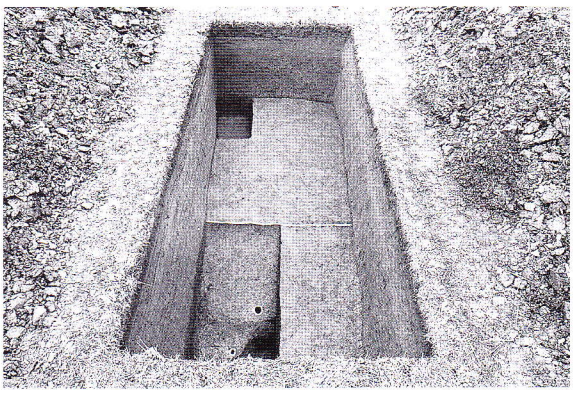


写真９　２-11区全景（北から）

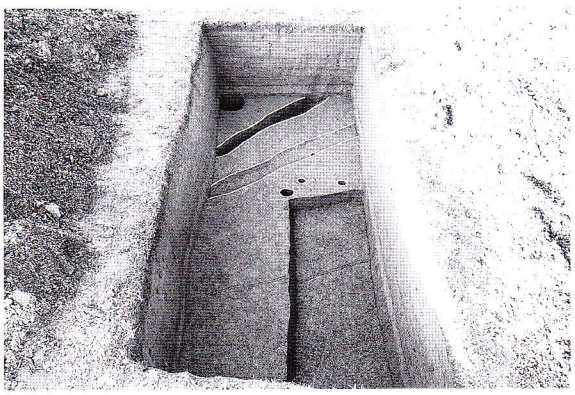


写真 10　２-12区全景

## 2．川辺遺跡 第４・５次調査

調 査 地　和歌山市川辺 208 番地 他
調査面積　1113.4 ㎡

### 位置と環境

第２・３次確認調査参照。

### 調査内容

第４・５次調査は、川辺遺跡の中央部における大規模開発（開発計画範囲約 70,000 ㎡）の一部である用水路改修部分について行った本発掘調査である。この調査は、昭和 62・63 年度及び平成３・４年度に財団法人和歌山県文化財センター（以下、「県センター」という。）が行った一般国道 24 号バイパス建設に伴う事前調査（調査面積 30,641 ㎡）及び、平成９・12・13 年度に同じく県センターが行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査（調査面積約 7,400 ㎡）の隣接する部分である。調査区については、幅約２m程度の調査区を延べ約 450 mにわたり設定して行った。また調査区が昇降進入路や水路によって分断されていたことから第４次調査では第１～24 区までの 24 ヶ所、第５次調査では第 25 ～ 27 区までの３ヶ所、合計 27 ヶ所の調査区として調査地区番号を付して調査を実施した。

県道和歌山貝塚線沿いにあたる第１～ 13 区については、主体となる遺構面が古墳時代から奈良時代を中心とするもので、標高 11.50m 前後である。この他、部分的に検出した上面にあたる鎌倉時代以降の遺構面も存在し、 2面の遺構面を検出した。また一般国道 24 号線沿いにあたる第 14 ～ 24 区及び第 25 ～ 27 区では先述の２面の遺構面の他、弥生時代中期と考えられる遺構面と縄文時代晩期の遺構面を部分的に検出し、最も多い部分で遺構面が４面存在することを明らかにした。遺構面の状況からみて、第１～ 13 区が微高地にあたり、竪穴住居などを検出したことからも居住域にあたるものと考えられる。第 14 ～ 22 区の範囲は遺構面の標高が 9.50m 前後まで落ち込む状況であり、微低地にあたることが明らかであり、多数の用水路と考えられる東西方向の溝や第 17 区で検出した畦畔などからも生産域であったものと想定できる。さらに、南側にあたる第 23・24 区は遺構面が上昇し、南側微高地部の北端部に位置するものと考えられる。

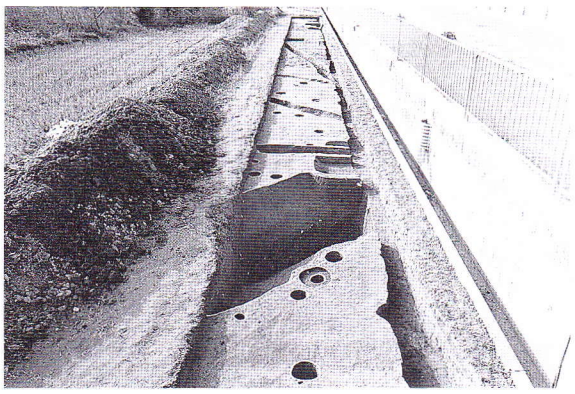


写真１　第２区全景（東から）

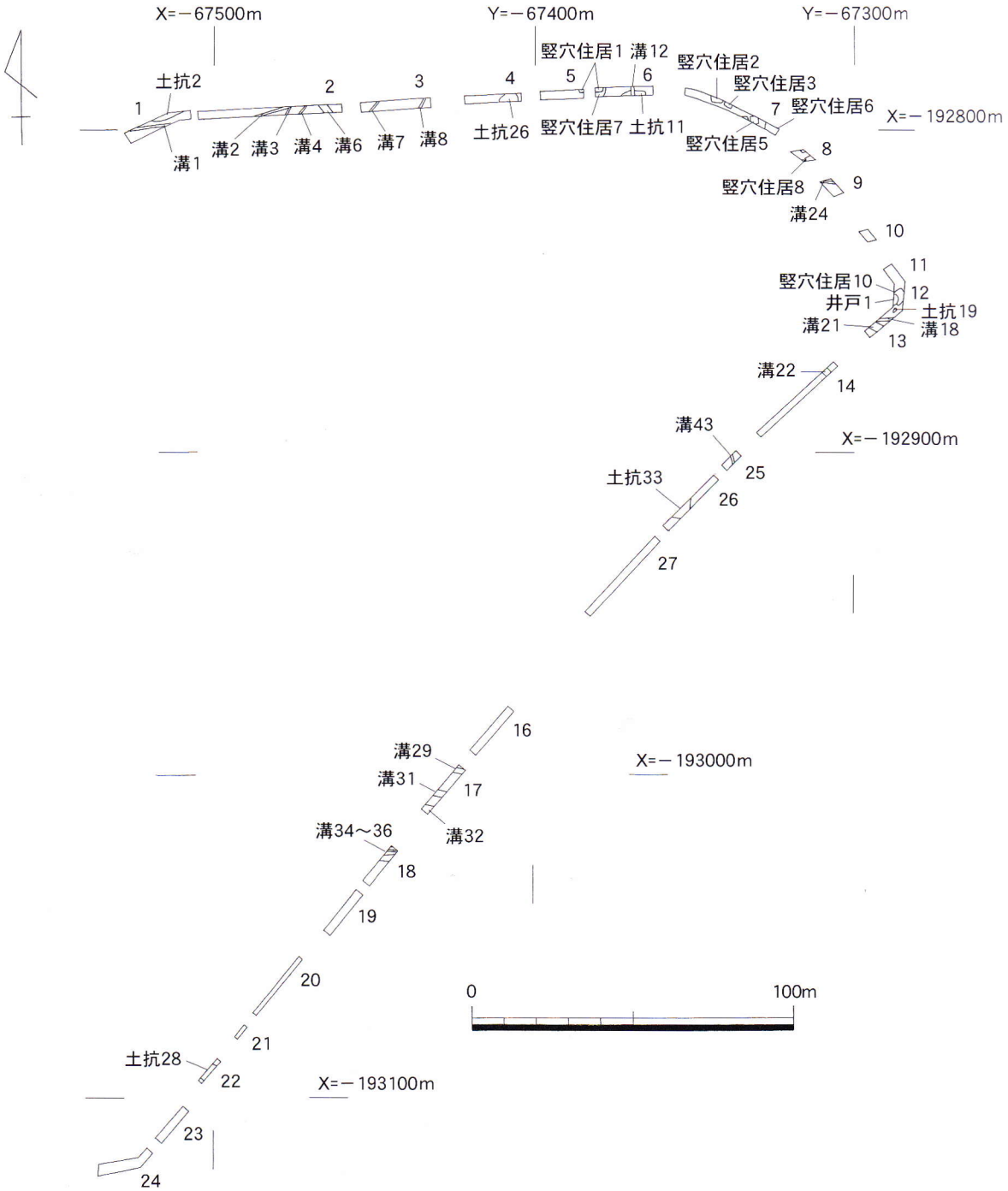
写真２　第２区溝６土層堆積状況（南東から）

以下、主要な遺構を説明する。

溝６は第２区東端部で検出した古墳時代初頭頃に

掘削された南北方向の溝であり、幅2.6m、深さ1.3mで断面形が「V」字状の形状である。土層の断面観察からみて、古墳時代後期以降に再掘削が行われたことが確認でき、その時点の規模が上端幅2.5m、深さ1.0mである（写真1・2）。

第5区から第8区にかけては、竪穴住居が集中して検出できた地点である（写真3）。時期的には最も古いものとして古墳時代初頭の円形住居（竪穴住居 7）が、次いで古墳時代前期の方形住居（竪穴住居1）があり、この2棟は重なり合って検出した。この他、古墳時代中期以降の範疇にあたるものとして竪穴住居 3・6が、飛鳥時代にあたるものとして竪穴住居2・5・8があり、これら




主要遺構配置図（数字番号は調査地区番号を示す。）

はすべて方形住居である。この中で比較的状況が分かるものとして竪穴住居５・８がある。竪穴住居５は第７区東半部で検出した４本柱の方形竪穴住居で、一辺 3.1m のほぼ正方形状である。覆土は 25 ㎝程度で幅 10 ～ 20 ㎝、深さ 10 ㎝の壁溝が周囲に巡る（写真４）。竪穴住居８は、第８区で確認した東西 2.8m 以上、南北 1.8m 以上の方形竪穴住居で壁面直下に幅 20 ㎝、深さ 10 ㎝程度の壁溝が巡る。また北側壁面において造り付けのカマドを検出した。カマドはやや外側に張り出す形状で、袖部は約 60 ㎝の長さで馬蹄形に延びる（写真５）。

第 12 区では最も良好に遺存する古墳時代初頭の竪穴住居（竪穴住居 10）と住居廃絶後に掘削された６世紀末から７世紀の初頭頃の井戸（井戸１）を検出した。竪穴住居 10 は長辺 4.8m、短辺 3.5m の長方形で、床面までの深さが 70 ㎝と極めて深い。検出した２基のピットから４本柱の住居であったものと考えられ、床面中央部に直径 60 ㎝、深さ 12 ㎝の炉が確認できた。壁溝は、幅約 20 ㎝、深さ 10 ㎝程度でほぼ全周する。井戸１は掘削段階で竪穴住居 10 の凹みを利用して掘り進められたものと考えられる。規模は、南北幅 3.5m 以上を測る大規模なもので、深さは 1.7m( 標高 9.4m) まで掘削されている。覆土には多量の土器が含まれており、中でも須恵器の割合が多く、器種では蓋杯が少なく、壺・甕が一定量あり、極めて多いものが提瓶である。このことは、水辺の祭祀に関わる特殊な出土傾向の一例といえる（写真６）。また第 12 区と第 13 区の境目で検出した土坑（土坑 19）は、東西 0.7 m、南北 1.3 m、深さ 25 ㎝で副葬品をもつ土葬墓である。副葬品には土師器皿３点、瓦器椀１点の他、石灰岩系の石材を用いた砥石１点や全長 30.0 ㎝の鉄製の小刀１点、銭貨（北宋銭）６枚がある。埋葬時期は鎌倉時代後期の南北朝期頃と考えられる（写真７）。

第 17 区から第 18 区にかけては、ほぼ東西方向に主軸をもつ溝群を検出した。溝の時期は古墳時代後期から平安時代にかけてのものがあり、用途として

写真３　第７区全景（南東から）

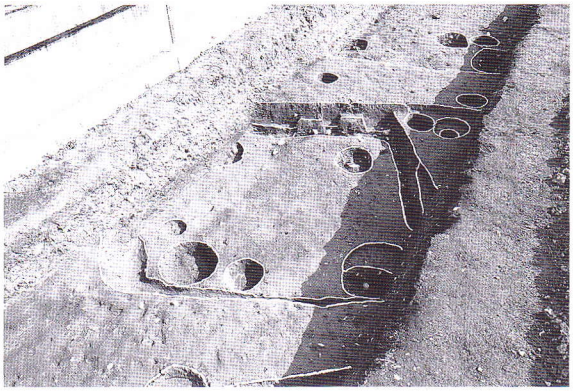


写真４　第７区竪穴住居５（西から）

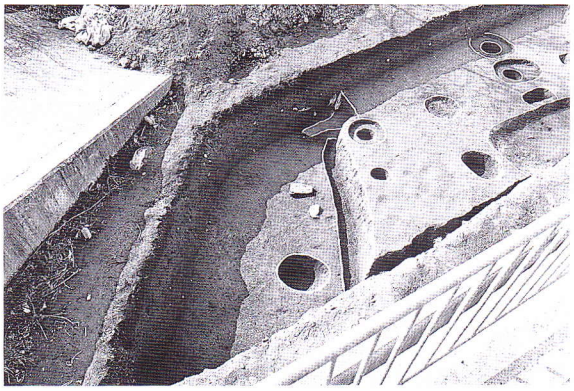


写真５　第８区竪穴住居８（北東から）

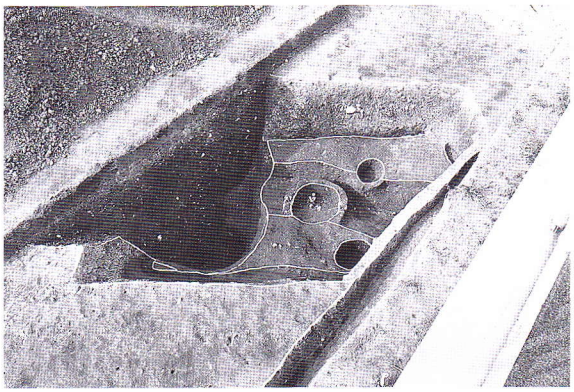


写真６　第 12 区竪穴住居 10・井戸１（南東から）

灌漑用水路と考えられる（写真８）。

第25区から第27区にかけては最も縄文時代の遺構が検出された地点である。第25区で確認した円形土坑（土坑38）は、直径85㎝、深さ25㎝のもので、底面全体が赤変し、焼土塊になる状況であり、長期間被熱を帯びたものと考えられる（写真９）。また第26区で検出した方形土坑（土坑42）は、東西2.5m以上、南北3.5m以上の比較的大規模なもので、遺構底面から検出したピット内部から縄文時代晩期の深鉢が出土した（写真10）。これらは、遺構面の時期からみて縄文時代晩期頃と考えられる。

## まとめ

まず縄文時代の遺構面では第17区より以北にその広がりが認められ、第１～13区では確認できなかったことから北東部にその中心が広がるものと考えられる。また第14・16・17・25～27区で検出した弥生時代中期の遺構面は、確認調査の成果からみてもこれらの地区の東側に展開しているものと考えられる。そして、調査区全域において検出した弥生時代後期末から奈良時代にかけての遺構面は、遺跡北部にあたる第１～13区と最南端の第24区において竪穴住居や掘立柱建物に伴うピットなどの居住域を示す遺構群が検出され、地形的にも微高地であることが確認できた。その反面、第14～23区では遺構面の標高が低く、検出された遺構も用水路と考えられる溝が主体であった。特に第14・15区及び第18･19区は緩やかな谷状の地形を呈し、下層に黒色系の粘土質層が堆積していたことから古墳時代の水田もしくは低湿地であるものと考えられよう。また中世の遺構の広がりは、第１～13区を中心とした北側微高地上において展開していることも確認できた。これらの詳細は第６次調査分も含め報告書にまとめているので参照されたい。

（井馬好英）

【参考文献】『川辺遺跡第４・５・６次発掘調査報告書』　和歌山市都市整備公社　2009年

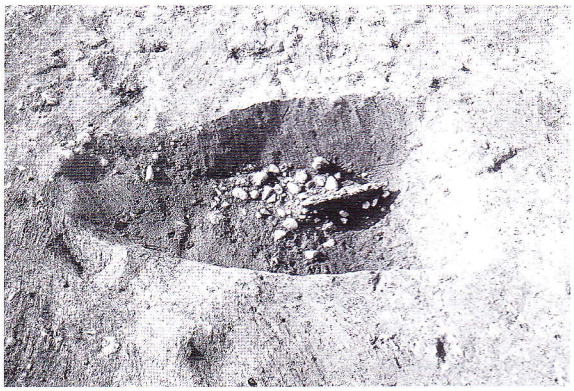


写真７　第13区土坑19（東から）

写真８　第17区全景（南西から）

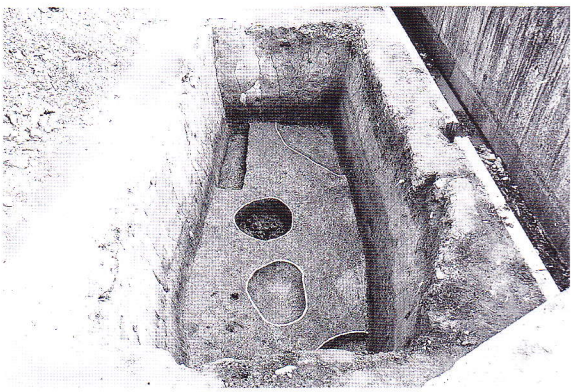


写真９　第25区縄文時代の遺構面（南西から）

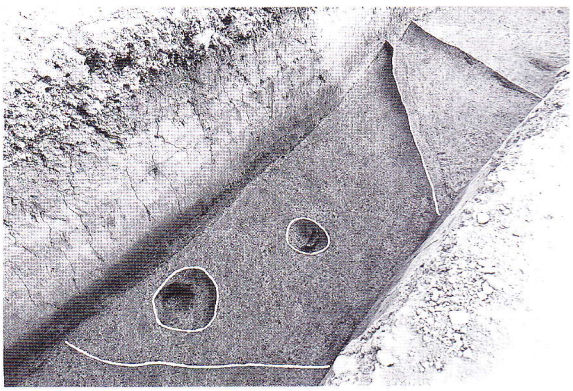


写真10　第26区土坑42（北から）

# Ⅲ．遺物整理報告等

## 1．和歌山市鳴神貝塚出土の人骨

安部　みき子[1)]・伊地知　怜子[1)]・長岡　朋人[2)]
1）大阪市立大学大学院医学研究科、 2）聖マリアンナ医科大学

### はじめに

和歌山市に位置する鳴神貝塚（鳴神Ⅳ遺跡第10次調査）の縄文時代晩期の貝層から出土した人骨は保存状態が、非常に良好であった。今回の調査で人骨が確認された土壙墓は4基で、そのうち3基がほぼ同位置に重複しており、残りの1基は約3m南に位置していた。重複していた3基の土壙の層位は上層から第7層（SX-1）、第7層の下層（SX-2）と第8層（SX-3）であり、埋葬時期の差はほとんどないと推測されている。これらの土壙から発掘された人骨は単葬と合葬が混在しており、特に合葬の場合土壙の重複が大きいため、出土骨の個体を特定することが困難であった。したがって、取上げ時に個体番号を与えたが、クリーニング後に再検証の結果、第7層は3体（1号、2号、3号）、第7層の下の層は1体（4号）、第8層は2体（6号、7号）が特定でき、これらと離れた位置の土壙の人骨を9号とした。また、取上げ時に5号とした頭骨は7号と同一の可能性があり、8号も6号と同一の可能性が大きいため、5号は7号にまた8号は6号として扱い、5号と8号は欠番とした。

性の判定は成人のみを対象とし、頭骨は眉状隆起と乳様突起の発達程度（Ubelaker, 1989）、寛骨は前耳状溝、大坐骨切痕、composite arch（Bruzek, 2002）に基づいた。他には四肢骨の大きさや筋付着部の発達程度を考慮して判定した。年齢は歯の咬耗（Lovejoy, 1985; Martin and Knussmann, 1988）や腸骨耳状面（Lovejoy et al., 1985）に基づいた。取りあげ時に骨端が明確に観察できるものに関しては長骨の最大値をコンベックスで計測し、クリーニング後に再度計測を行った。骨計測はマルチンの骨計測法（Martin and Knussmann, 1988）に従った。頭蓋計測値は先行研究（宮本、1924；清野・宮本、1925；中橋・永井、1989；池田、1993；長岡・熊倉、2002；長岡ほか、2006）の縄文時代人、弥生時代人、古墳時代人、中世人、江戸時代人、近代人の計測値と比較した。身長の推定は上腕骨、橈骨と大腿骨の最大長を用い、藤井（1960）、Pearson（1899）、佐宗・埴原ら（1998）、Stevenson（1929）とTrotterら（1958）の推定式で算出した。集団間の比較には、藤井（1960）の式を用い、先行研究（平本、1972；Wada and Motomura, 1999）の縄文時代人、弥生時代人、古墳時代人、中世人、江戸時代人、近代人の推定身長と比較した。

### 所見

#### 1・2・3号人骨

第7層（SX-1）から出土した3体は合葬であり、頭位はいずれも北で仰臥であった。

1号人骨は左上肢を伸展、右上肢は肘関節を外側に屈曲、下肢は、膝を屈曲させた状態で左右に開いており、下腿は交差させていた。出土部位は、下顎骨、胸郭、左右上肢骨、左寛骨と下肢骨で

あり、頭蓋骨は遺存していなかった。出土骨の保存状態は比較的良かったが、左側の上肢骨は悪かった。各骨の最大長は、右上腕骨は取上げ時の計測値が 28.5 cm、クリーニング後が 28.1 cmであり、左上腕骨と左尺骨の取上げ時計測値は前者が 26.5 cm、後者が 23.5 cmで、両者ともにクリーニング後の計測はできなかった。寛骨の大坐骨切痕が広く、前耳状溝のレリーフが深かったため、女性と推定できる。また、耳状面に多数の孔があり、Lovejoy et al. の 7 ～ 8 段階であり、推定年齢は 50 歳以上である。下顎骨の臼歯の磨耗程度からも熟年と推測される。右上腕骨で推定された身長は 147.7 cmで、縄文人女性の平均的な高さであった。抜歯と思われる歯槽閉鎖が、下顎左側切歯に見られ、それ以外の切歯と犬歯の歯槽部は破損していて観察できなかった。

2 号人骨の埋葬姿勢は、右上肢は伸展しており、右の下肢は屈曲の可能性があり、その他の骨格は 3 号人骨と混在していたため詳細な観察できなかった。出土部位は下顎骨、椎骨、肋骨、左右上肢骨、右の下肢骨であり、右上肢骨は骨端の破損が大きかった。骨計測は左上腕骨の取上げ時の値は 26.5 cmであるがクリーニング後は 24.1 cmで、尺骨の取上げ時の値が 23.5 cmであった。寛骨には深い前耳状溝が認められ、性は女性である。年齢は歯の磨耗程度から 30 才前後の壮年と推定された。身長は左上腕骨で推定され、137.5 cmとやや低身長であった。抜歯は下顎骨の左右切歯にみられた。上顎骨は出土していない。

3 号人骨も仰臥位で、上肢は左右ともに外側にゆるく屈曲しているが、下肢は保存が悪く確認されていない。出土部位は下顎骨、肋骨、椎骨と左右上肢骨であった。鎖骨・上腕骨・尺骨・橈骨・大腿骨の骨端は未癒合であり、骨盤の腸骨稜・Y 字軟骨・坐骨結節の軟骨も未癒合である。歯は下顎第一大臼歯が萌出し、下顎第二大臼歯は未萌出である。下顎犬歯は歯根が1 / 4から1 / 2ほどが形成している。推定年齢は 7 ～ 10 歳である。性別は不明である。

この 3 体は、 2号人骨が 3 号人骨を抱き、 1号人骨が寄り添うような状況で出土している。埋葬に伴う副葬品などは遺存していない。

4 号人骨

第 7 層下（SX-2）から出土した 4号人骨の頭位は北で、上肢は左右ともに伸展、下肢は屈曲しており、仰臥であった。出土部位はほぼ全身におよび、保存状態も良かった。特に頭骨の保存はよく、下顎骨も完全な形で出土しており、頭骨の復元ができ、頭骨の計測ができたものはこの個体のみであった。前耳状溝のレリーフが深かったため、女性と推定できる。寛骨では耳状面に billowing や striation があり、Lovejoy et al. の 3～ 5段階である。耳状面からの推定年齢は 30 ～ 40 歳代である。

頭骨の計測値は、脳頭蓋の幅が広く、頭骨長幅示数は 78 と中頭である。顔頭蓋は、コルマンの顔面示数が 63 で低顔過広顔、コルマンの上顔面示数が 49 で低上顔広上顔であった。骨計測ができた四肢骨は右鎖骨、上腕骨、橈骨と尺骨であり、取りあげ時の最大長は右鎖骨 13.5 cm、右上腕骨 27.0 cm、右尺骨 23.0 cmであったが、クリーニング後は右上腕骨 28.0 cm、橈骨 21.7 cmと尺骨の 23.2 cmであった。このうち、上腕骨と橈骨で推定した身長は上腕骨が 147.5 cm、橈骨が 151.5 cmとなった。

歯槽が観察できた下顎骨は両側の切歯と犬歯に抜歯がみられた。上顎骨は、左側の歯槽は破損していたが右側は遺存しており、切歯の歯根は健全であったが犬歯は歯槽閉鎖していた。この犬歯の脱落が抜歯によるものかは、左側の歯槽が遺存していないことなどから断定できなかった。

### ６・７号人骨

第８層（SX-３）から出土した６号人骨と７号人骨は、埋葬状況から合葬ではないと考えられる。

６号人骨の遺存部位は頭蓋骨片、下顎骨、右上腕骨と尺骨であり、取り上げ時に８号としたものは、肋骨と椎骨、左上肢骨、右橈骨、尺骨と指骨であり、６号と８号の右尺骨の部位は重複していないため、同一個体と考えられる。下顎歯の咬耗は、第一大臼歯では点状に象牙質に至るが、第二、三大臼歯では象牙質に至らない。歯の咬耗はLovejoyのＥ～Ｆ段階であるため、推定年齢は20～30歳代である。切歯と犬歯は歯槽の破損があり、抜歯の有無は観察できなかった。遺存していた長骨の筋付着部は発達しており、男性と推測される。身長の推定は推定に用いる長骨の最大長がいずれも計測できなかった。

７号人骨の埋葬姿勢は、上肢は左の肘関節を90度程度屈曲回内しており、下肢骨は両側とも屈曲していた。遺存部位は下顎骨、椎骨、肋骨、左の上肢骨、左右の下肢骨である。大坐骨切痕が広く、前耳状溝のレリーフが深かったため、女性と推定できる。寛骨では耳状面にbillowingやstriationがあり、Lovejoy et al.の 2～ 4段階である。耳状面からの推定年齢は20～30歳代である。左中切歯と右側切歯の歯槽が閉鎖していることが観察されているが、左側切歯と右中切歯は歯槽が閉鎖していないので、抜歯が行われていたとは考えにくい。身長は右大腿骨より154.6㎝と推定された。

### ９号人骨

９号人骨は前述の土壙より約３m離れた位置にある土壙から出土しており、頭蓋骨の一部、下顎骨、大腿骨などが出土している。遺存していた側頭骨の乳様突起は大きく、長骨の筋付着部は発達が著しく、大腿骨骨幹部が頑丈で湾曲していることから男性と推測される。下顎骨の歯槽は全て閉鎖しており、年齢は熟年と推定される。身長は、右上腕骨を用いると153.3㎝となり、右大腿骨では155.5㎝である。この結果は当時の縄文人の男性に比べて低身長であるが、頑丈な体格であったことが推測できる。

## 考　察

### 集団構成

本遺跡から出土した人骨の構成は男性２体、女性４体、未成年１体の合計７体であった。頭蓋は遺存状態が悪く、 4号人骨以外は骨計測ができる状態に復元することが困難であった。

### 計測値

頭蓋計測（表１）ができた個体は４号女性人骨のみであるが、脳頭蓋は最大長と最大幅とも比較資料よりも大きかった（図１、表２）。顔面頭蓋もまた幅径が小さく、高径が大きい特徴を持っており、比較資料とは異なる形態を持っていた（図２）。頭蓋計測値からみると、どの比較集団とも異なる特徴を持っていた。この傾向は資料の少なさによる偏りと推測できる。次に、長骨最大長（表３）を用いて身長推定を行った（表４）。藤井（1960）の式に基づいた推定身長は、男性151㎝、女性148㎝であった（表５）。男性は比較資料のいずれの集団よりも身長が小さかったが、女性は比較資料の縄文人骨と同程度、弥生・古墳人骨よりも３㎝小さかった（表６）。

### 抜歯

抜歯の風習は縄文時代によく見られるが、本遺跡では、成人女性の４体なかで３体の下顎骨に抜

歯と推測される歯槽閉鎖が見られた。抜歯された歯種は２号人骨が切歯のみ、４号人骨が切歯と犬歯であった（表７）。一方、上顎の抜歯については、歯槽が遺存しているものがないため不明である。本遺跡の 1952 年の調査で縄文時代晩期の 18 才前後と推定された女性の人骨１体が出土したとの報告がある。埋葬形式は伸展葬で、頭骨の左側に猿の橈骨で作られた耳栓を装着し、上下切歯を抜歯しており、シャーマン（巫女）の可能性があると考えられている。本遺跡の抜歯の風習は女性の間で比較的頻繁におこなわれていると思われるが、抜歯の有無や歯種のばらつきがみられる。このことは、何らかの社会的な理由があると推測される。今後の分析と追加資料の蓄積によって当時の風習を知る手掛かりが得られる可能性がある。

【参考文献】


・Bruzek J. (2002) A method for visual determination of sex using the human hip bone. American Journal of Physical Anthropology, 117: 157-168.
・藤井明（1960）四肢長骨の長さと身長の関係について．順天堂大学体育学部紀要，3：49-61.
・Herausgegeben von Rainer Knubmann(1988) Anthropologie,Gustav Fischer Verlag.Stuttgart.New York
・平本嘉助（1972）縄文時代から近代に至る関東地方人身長の時代的変化．人類学雑誌，80：221-236.
・池田次郎（1993）古墳人．古墳時代の研究，Ｉ，総論・研究史，27-95，有山閣，東京.
・清野謙次・宮本博人（1925）津雲貝塚人人骨の人類学的研．究―第二部頭蓋骨の研究．人類学雑誌，41- 3：95-208.
・Lovejoy C. O. (1985) Dental wear in the Libben population: its functional pattern and role in the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68: 47-56.
・Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., and Mensforth R.P. (1985) Chronological metamorphosis of the auricular surface of the illium: A new method of determining adult age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68: 15-28.
・Martin R. and Knussmann R. (1988) Anthropologie. Band Ｉ. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
・宮本博人（1924）現代日本人人骨の人類学的研究．人類学雑誌，39，307-451.
・長岡朋人・熊倉博雄 (2002) 旧吉原墓地（大阪市）から出土した近世人頭蓋の形態的特徴．Anthropological Science (Japanese series)，109，85-100.
・長岡朋人・静島昭夫・澤田純明・平田和明（2006）中世日本人の頭蓋形態の変異．Anthropological Science (Japanese series), 114: 139-150
・中橋孝博・永井昌文（1989）弥生人―1．形質．永井昌文・．那須孝悌・金関恕・佐原眞編，弥生文化の研究 1．雄山閣，東京，pp. 23-51.
・Pearson K. (1899) Mathematical contribution to the theory of evolution V. On the reconstruction of the stature of prehistoric races. Philosohical Transactions of the Royal Society of London, Series A, 192: 169-244.
・佐宗亜衣子・埴原恒彦（1998）日本人女性の新しい身長推定式．Anthropological Science (Japanese Series), 106: 55-66.
・Stevenson P. H. (1929) On the racial differences in stature long bone regression formulae for Chinese. Biometrica, 21: 303-321.
・Trotter M. and Gleser G. C. (1958) A re-examination of estimation of stature based on measurements of stature taken during life and of long bones after death. American Journal of Physical Anthropology, 10: 463-514.
・Ubelaker D. H. (1989) Human skeletal remains. Excavation, analysis, interpretation. Aldine, Chicago.
・Wada Y. and Motomura H. (2000) Temporal changes in stature in western Japanese based on limb characteristics. Anthropological Science, 108: 147-168.

・巽三郎・羽磨正信（1958）「和歌山県下の縄文式文化大観」『古代学研究』第 18 号古代学研究会
・石部正志（1968）「鳴神貝塚発掘調査報告」『和歌山県文化財学術調査報告書』和歌山県教育委員会
・中村貞史（1971）『鳴神貝塚発掘調査概報』（社）和歌山県文化財研究会
・『史跡鳴神貝塚保存管理計画策定報告書』（1978）和歌山県教育委員会
・「鳴神Ⅳ遺跡第 10 次調査・範囲確認調査書」『和歌山市内遺跡発掘調査概報- 平成 16 年度』（2006） 和歌山市教育委員会

表１　４号人骨の頭骨の計測表

| ＜頭蓋＞ | | 測定値 |
|---|---|---|
| 頭骨最大長 | g － op | 184.22 |
| グラベラ・ラムダ長 | g － l | 180.81 |
| 頭骨最大幅 | eu － eu | 144.09 |
| 最小前頭幅 | ft － ft | 94.34 |
| 最大前頭幅 | co － co | 116.36 |
| 両耳幅 | au － au | 129.75 |
| 最大後頭幅 | ast － ast | 112.80 |
| 基底幅 | ms － ms | 97.12 |
| 耳ブレグマ高 | po － b | 122.86 |
| ＜顔面＞ | | |
| 上顔幅 | fmt － fmt | 106.57 |
| 頬骨弓幅 | zy － zy | 111.38 |
| 顔高 | n － gn | 142.57 |
| 上顔高 | n － pr | 69.93 |
| ＜下顎骨＞ | | |
| 関節突起幅 | kdl － kdl | 128.67 |
| 下顎角幅 | go － go | 107.40 |
| 下顎骨長 | (左) | 91.32 |
| | (右) | 90.22 |
| 顆高（オトガイ高） | id － gn | 24.71 |
| 下顎枝高 | (左) | 58.76 |
| | (右) | 56.30 |
| 下顎枝幅 | (左) | 32.85 |
| | (右) | 33.42 |
| ＜各部示数＞ | | |
| 頭骨長幅示数 | | 78 |
| 顔面示数（コルマン） | | 128 |
| 上顔面示数（コルマン） | | 63 |

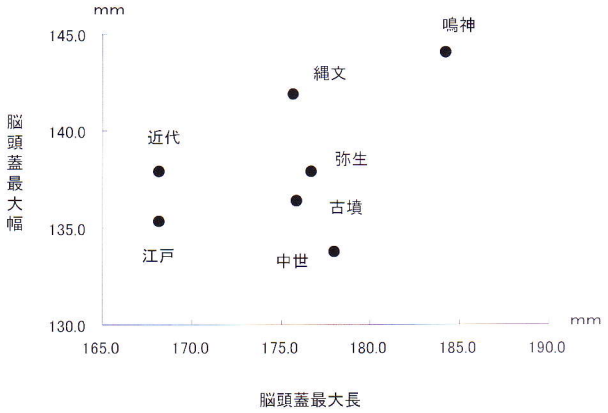



図１　鳴神遺跡と他集団の頭蓋計測値の比較

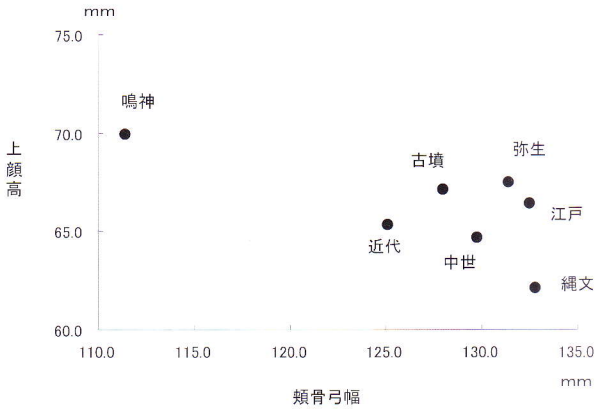



図２　鳴神遺跡と他集団の頭蓋計測値の比較

表２　頭蓋計測値の集団間比較（mm）

| 計測項目 | 鳴滝遺跡 | 縄文[1] | 弥生[2] | 古墳[3] | 中世[4] | 江戸[5] | 近代[6] |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 頭骨最大長 | 184.2 | 175.7 | 176.7 | 175.9 | 178.0 | 168.2 | 168.2 |
| 頭骨最大幅 | 144.1 | 141.9 | 137.9 | 136.4 | 133.8 | 135.3 | 137.9 |
| 上顔幅 | 106.6 | 126.1 | 130.0 | 133.0 | 131.9 | 133.6 | 131.0 |
| 頬骨弓幅 | 111.4 | 132.8 | 131.4 | 128.0 | 129.8 | 132.5 | 125.1 |
| 上顔高 | 69.9 | 62.1 | 67.5 | 67.1 | 64.7 | 66.4 | 65.3 |
| 頭骨長幅示数 | 78.2 | 80.8 | 78.0 | 77.5 | 75.2 | 80.4 | 82.0 |
| 上顔面示数(コルマン) | 62.8 | 46.8 | 51.4 | 52.4 | 49.8 | 50.1 | 52.2 |

1　清野・宮本（1924）
2　中橋・永井（1989）
3　池田（1993）
4　長岡ほか（2006）
5　長岡・熊倉（2002）
6　宮本（1924）

表３　長骨の最大長（mm）

| | | １号 | ２号 | ３号 | ４号 | ７号 | ９号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上腕骨 | 右 | 280.8 | — | — | 279.7 | — | 272.1 |
| | 左 | — | 241.3 | — | — | — | — |
| 橈骨 | 右 | — | — | — | 217.1 | — | — |
| 尺骨 | 右 | — | — | — | 231.8 | — | — |
| 大腿骨 | 右 | — | — | — | — | 420.2 | 393.3 |

表４　身長の推定値

| | | | | 計測値 | Pearson (1899) | 藤井 (1960) | 佐宗・埴原 (1998) | Min | Max | Mean |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 女性 | １号 | 上腕骨 | 右 | 280.8 | 148.8 | 148.1 | 146.3 | 146.3 | 148.8 | 147.7 |
| | ２号 | 上腕骨 | 左 | 241.3 | 137.9 | 138.8 | 135.7 | 135.7 | 138.8 | 137.5 |
| | ４号 | 上腕骨 | 右 | 279.7 | 148.5 | 147.9 | 146.0 | 146.0 | 148.5 | 147.5 |
| | | 橈骨 | 右 | 217.0 | 153.8 | 150.9 | 149.8 | 149.8 | 153.8 | 151.5 |
| | ７号 | 大腿骨 | 右 | 420.1 | 154.6 | 155.1 | 152.7 | 152.7 | | 154.1 |

| | | | | 計測値 | Pearson (1899) | Stevenson (1929) | Trotter and Gleser (1958) | Trotter and Gleser (1958) | 藤井 (1960) | Min | Max | Mean |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男性 | ９号 | 上腕骨 | 右 | 272.1 | 149.4 | 158.1 | 156.0 | 153.9 | 149.2 | 149.2 | 158.1 | 153.3 |
| | | 大腿骨 | 右 | 393.3 | 155.2 | 157.6 | 157.4 | 155.2 | 152.0 | 152.0 | 157.6 | 155.5 |

表５　鳴神遺跡の推定身長[1]

| | | 推定身長 |
|---|---|---|
| ９号 | 男性 | 150.6 |
| 男性平均 | | 150.6 |
| １号 | 女性 | 148.1 |
| ２号 | 女性 | 138.8 |
| ４号 | 女性 | 149.4 |
| ７号 | 女性 | 155.1 |
| 女性平均 | | 147.9 |

1　藤井 (1960) の身長推定式による。

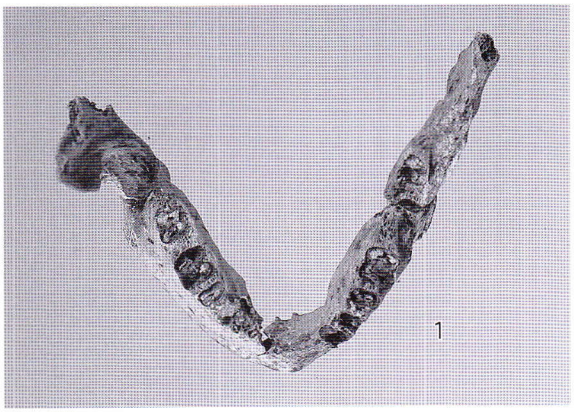
表６．推定身長の比較：鳴神遺跡出土人骨と他集団との間で比較を行った[1]

| 集団 | 地域 | 男性個体数 | 平均 | 女性個体数 | 平均 |
|---|---|---|---|---|---|
| 鳴神遺跡 | 和歌山 | 1 | 150.6 | 4 | 147.9 |
| 縄文[2] | 関東 | 11 | 159.1 | 9 | 148.1 |
| 弥生[3] | 北部九州・山口 | 77 | 161.4 | 66 | 150.8 |
| 古墳[2] | 関東 | 22 | 163.1 | 9 | 151.5 |
| 鎌倉[2] | 関東 | 17 | 159.0 | 5 | 144.9 |
| 室町[2] | 関東 | 26 | 156.8 | 17 | 146.6 |
| 江戸[2] | 関東 | 95 | 157.1 | 45 | 145.6 |
| 近代[2] | 関東 | 43 | 155.3 | 43 | 144.8 |

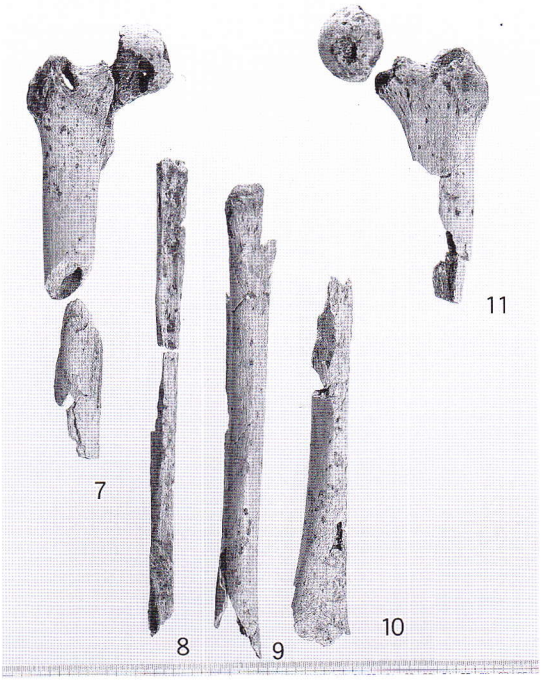
1　藤井の身長推定式による。比較資料は大腿骨最大長に基づく。
2　平本 (1972)　3　Wada and Motomura (1999)

表７　　下顎骨の歯の状況

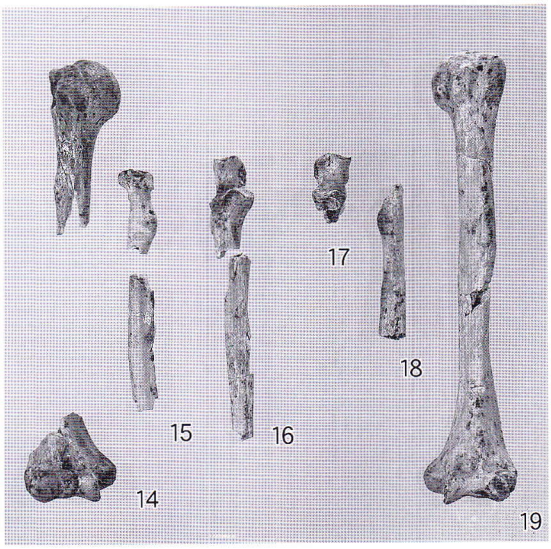
| | 左 | | | | | | | | 右 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | M３ | M２ | M１ | Pm２ | Pm１ | C | I２ | I１ | I１ | I２ | C | Pm１ | Pm２ | M１ | M２ | M３ |
| １号 | 欠損 | 閉鎖 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 抜歯 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 無し |
| ２号 | 弱磨耗 | 不明 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 正常 | 抜歯 | 抜歯 | 抜歯 | 抜歯 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 弱摩耗 |
| ３号 | 無し | 歯槽内 | 正常 | 正常 | 歯槽内 | 正常 | 正常 | 正常 | 遊離 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 欠損 | 歯槽内 | 無し |
| ４号 | 強磨耗 | 強磨耗 | 強磨耗 | 強磨耗 | 弱磨耗 | 抜歯 | 抜歯 | 抜歯 | 抜歯 | 抜歯 | 抜歯 | 強磨耗 | 強磨耗 | 中磨耗 | 強磨耗 | 強磨耗 |
| ６号 | 弱磨耗 | 中磨耗 | 強磨耗 | 遊離 | 遊離 | 不明 | 不明 | 遊離 | 欠損 | 遊離 | 遊離 | 弱磨耗 | 不明 | 強磨耗 | 中~強磨耗 | 遊離 |
| ７号 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 遊離 | 閉鎖 | 遊離 | 閉鎖 | 遊離 | 欠損 | 閉鎖 | 閉鎖 | 欠損 | 欠損 |
| ９号 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 | 閉鎖 |




1号人骨　1 下顎骨（1／2）

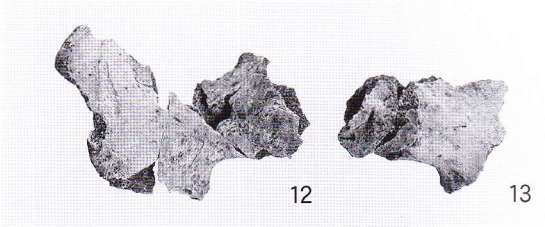



1号人骨　右　7 大腿骨　6 腓骨　9 脛骨
左　10 脛骨　11 大腿骨（1／4）

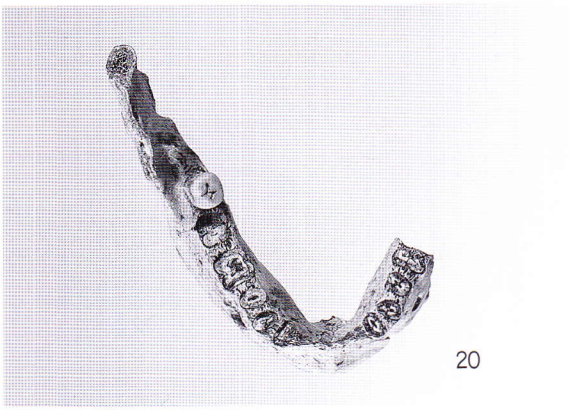



2号人骨　右　14 上腕骨　15 橈骨　16 尺骨
左　17 尺骨　18 橈骨　19 上腕骨（1／4）

1号人骨　右 2 上腕骨　3 橈骨　4 尺骨　上腕骨
左 5 尺骨　6 上腕骨（1／4）

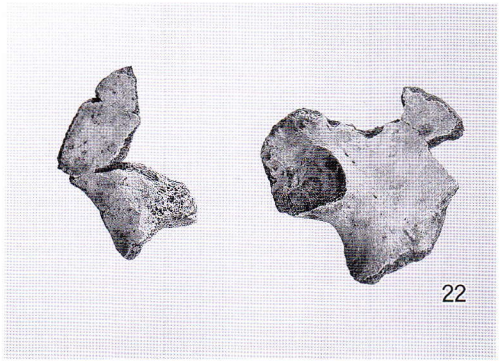



1号人骨　12 右寛骨　13 左寛骨（1／4）

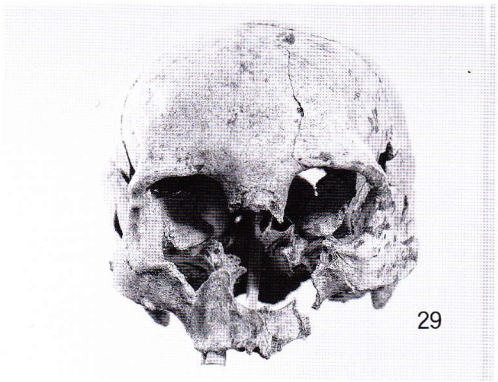



2号人骨　20 下顎骨（1／2）

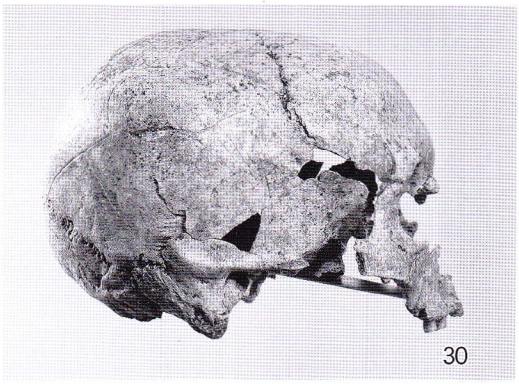
3号人骨　21 下顎骨（1／2）



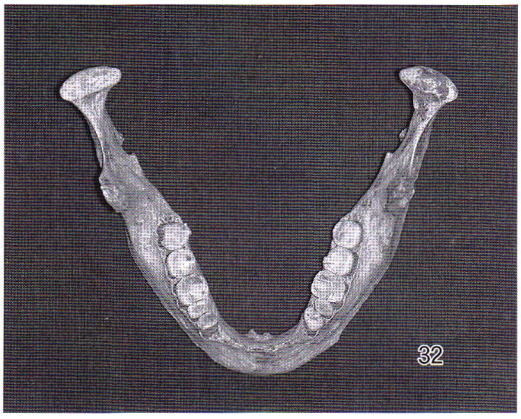

3号人骨　寛骨（1／3）



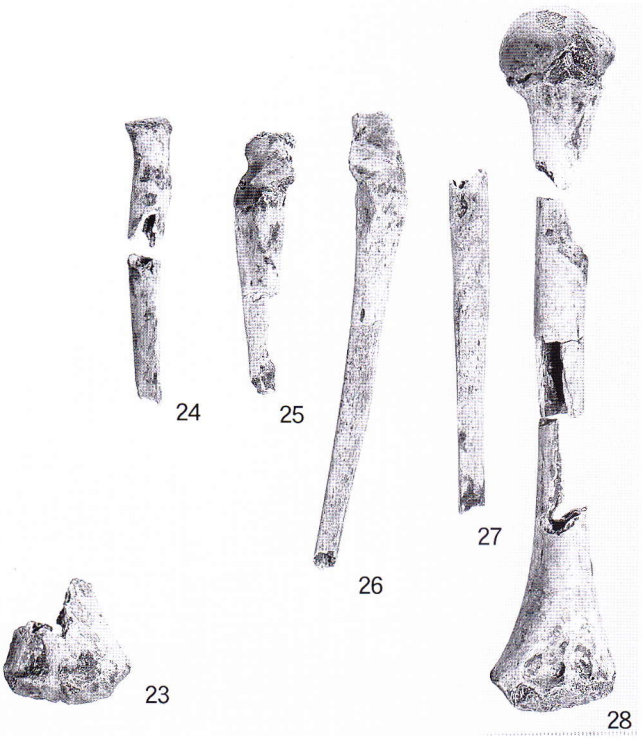

4号人骨　30 頭蓋骨前面（1／4）




4号人骨　30 頭蓋骨右外側面（1／4）

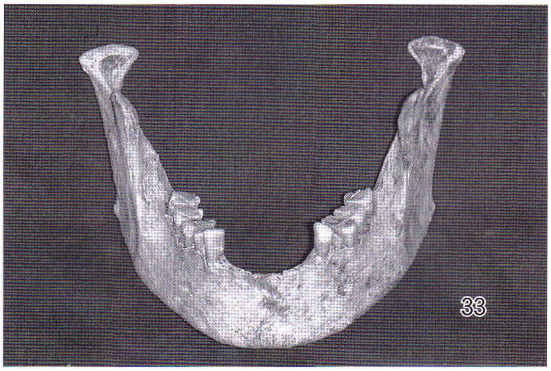



4号人骨　33 下顎骨上面

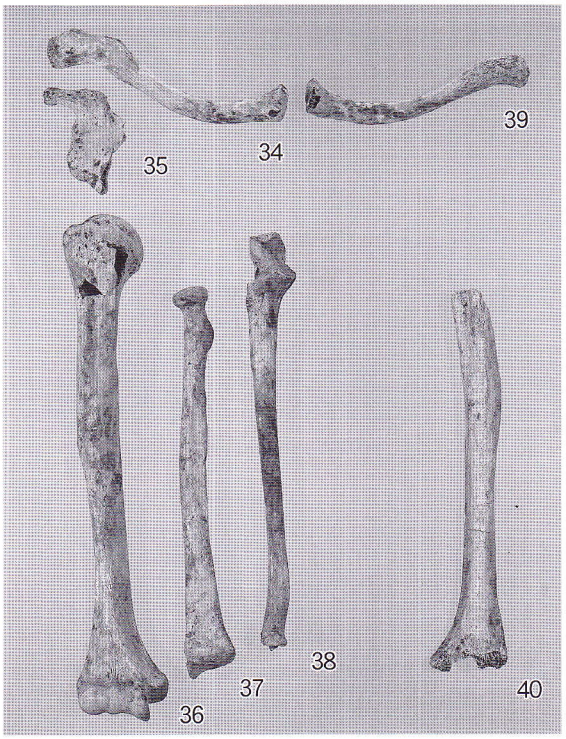



3号人骨　右　23 上腕骨　24 橈骨　25 尺骨
左　26 尺骨　27 橈骨　28 上腕骨　（1／2）

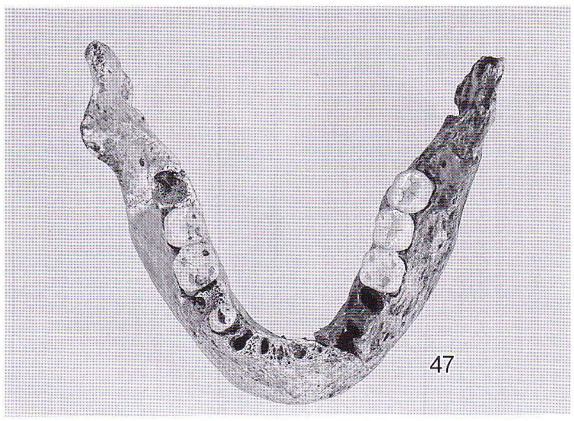
4号人骨　31 頭蓋骨上面（1／4）



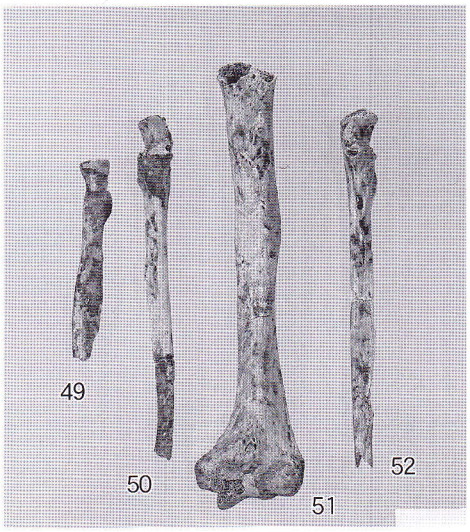

4号人骨　34 下顎骨前面



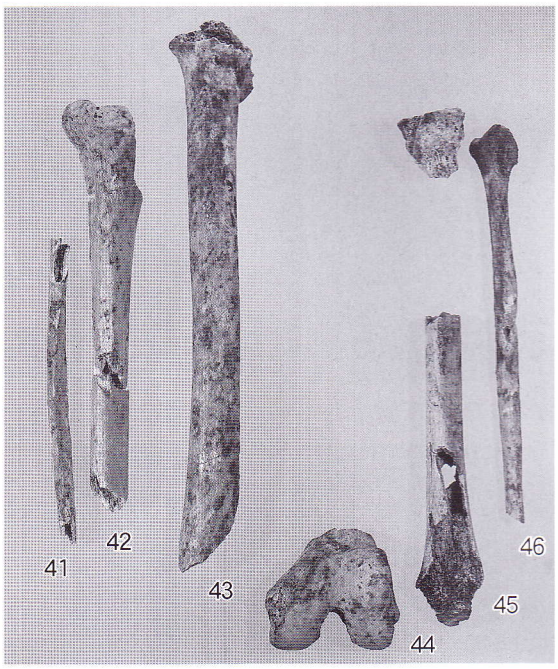

4号人骨　右　34 鎖骨　35 肩甲骨　36 上腕骨　37 橈骨　38 尺骨
　　左　39 鎖骨　40 上腕骨（1／4）



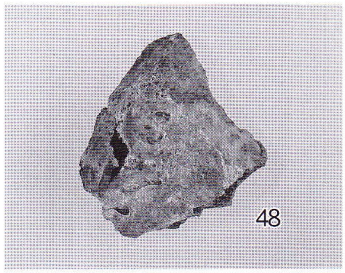

6号人骨　47 下顎骨　（1／2）



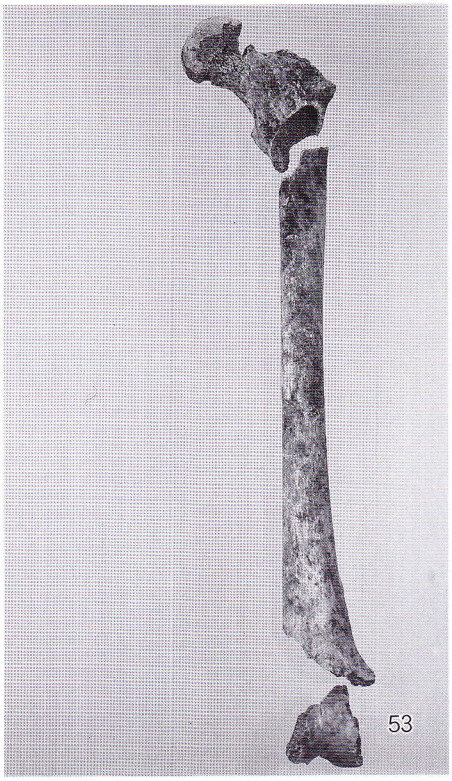

6号人骨　右　49 橈骨　50 尺骨
　　左　51 上腕骨　52 尺骨（1／4）



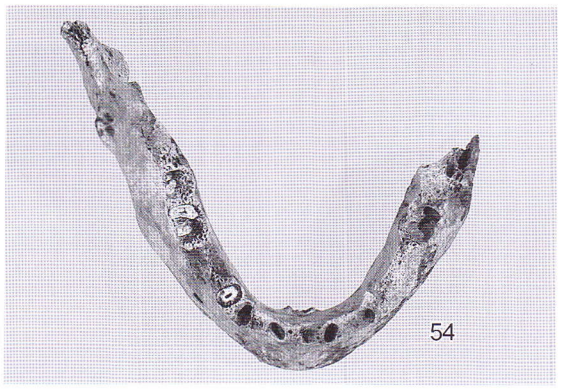

4号人骨　右　41 腓骨　42 脛骨　43 大腿骨
　　左　44 大腿骨　45 脛骨　46 腓骨（1／4）



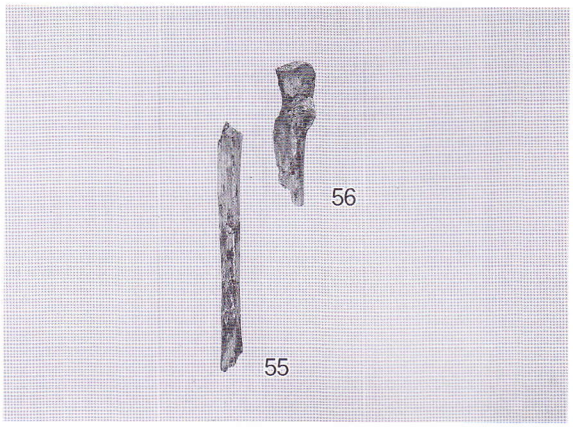

4号人骨　48 寛骨　（1／3）



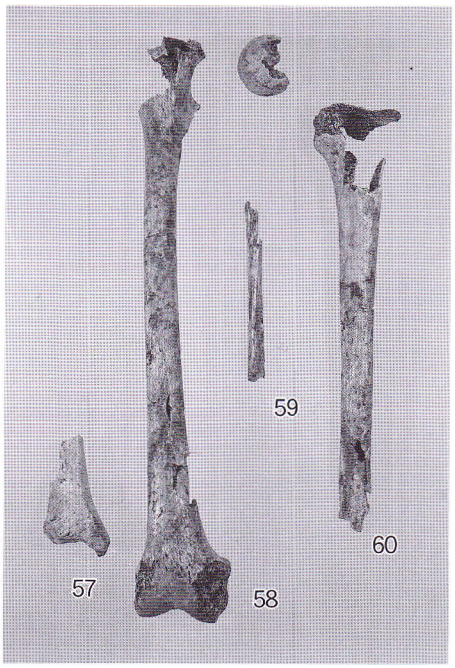

6号人骨　53 右 大腿骨（1／4）



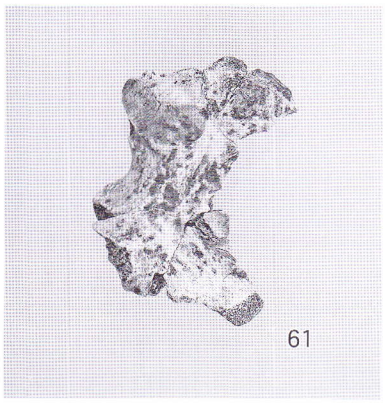

7号人骨　54 下顎骨（1／2）



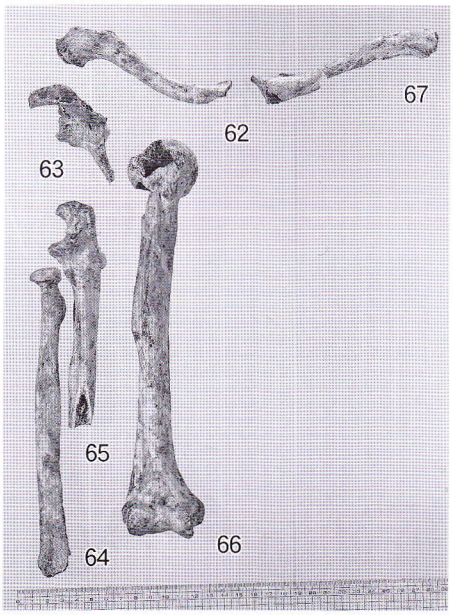

7号人骨　55 右橈骨　56 右尺骨（1／4）



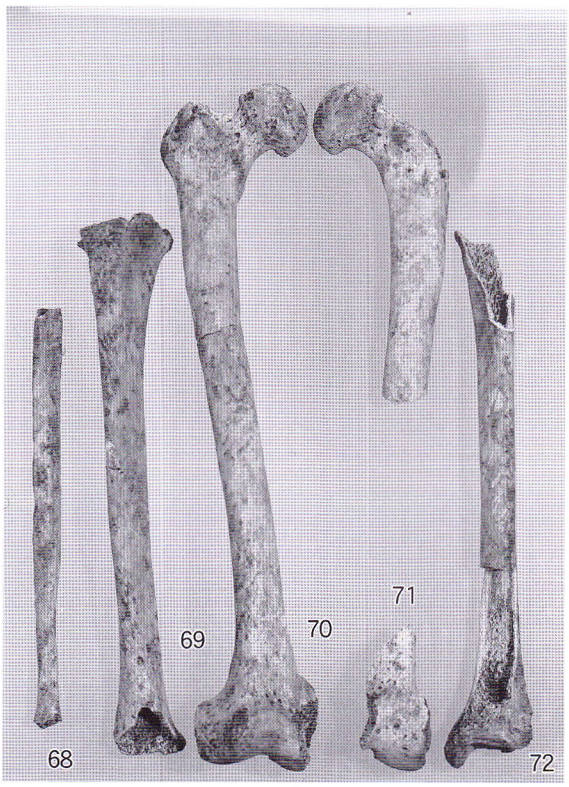

7号人骨　右　57 脛骨　58 大腿骨
　　左　59 腓骨　60 脛骨（1／5）




7号人骨　寛骨（1／4）




9号人骨　右　62 鎖骨　63 肩甲骨　64 橈骨　65 尺骨　66 上腕骨
　　左　67 鎖骨（1／5）




9号人骨　右　68 腓骨　69 脛骨　70 大腿骨
　　左　71 大腿骨　72 脛骨（1／4）

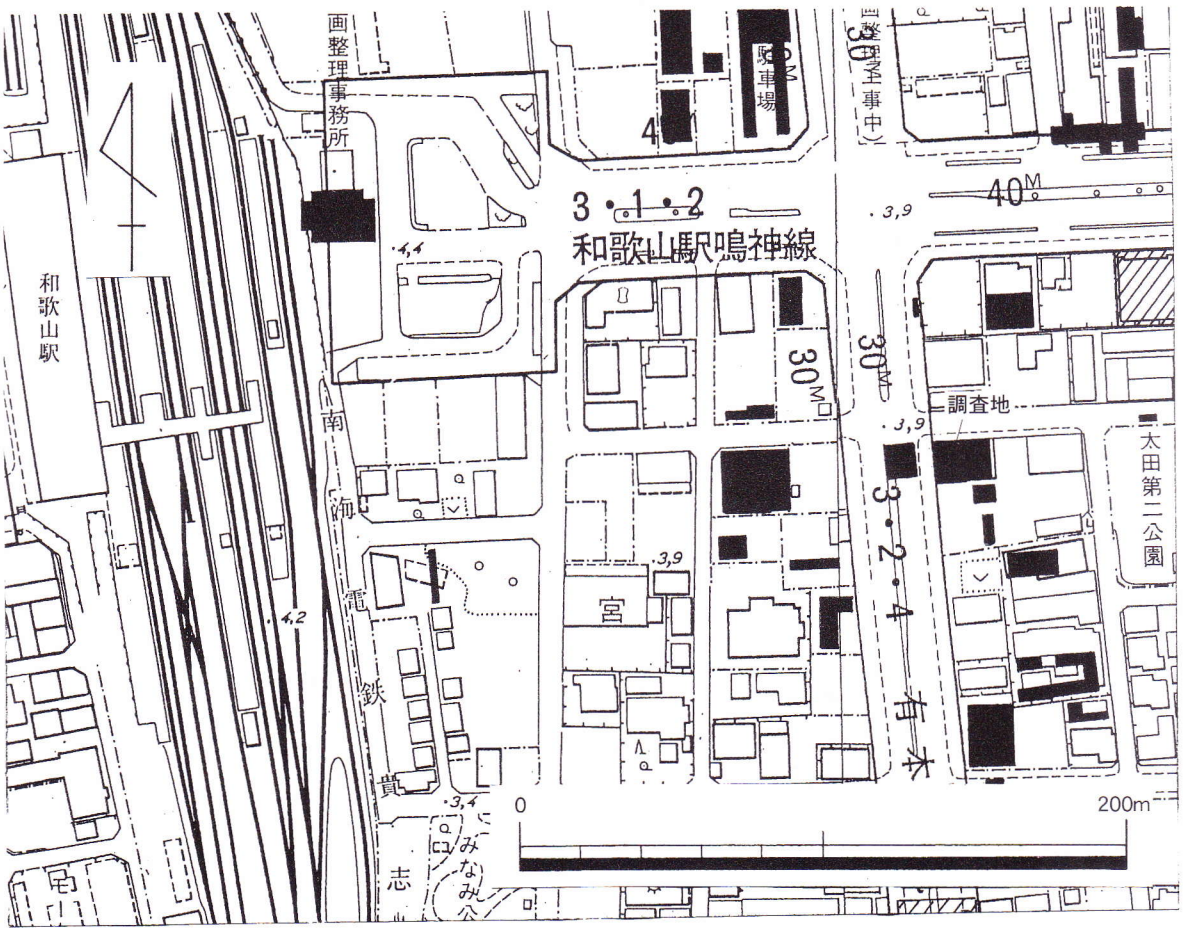
## 2．太田・黒田遺跡 第22次調査遺物整理

### 調査の概要

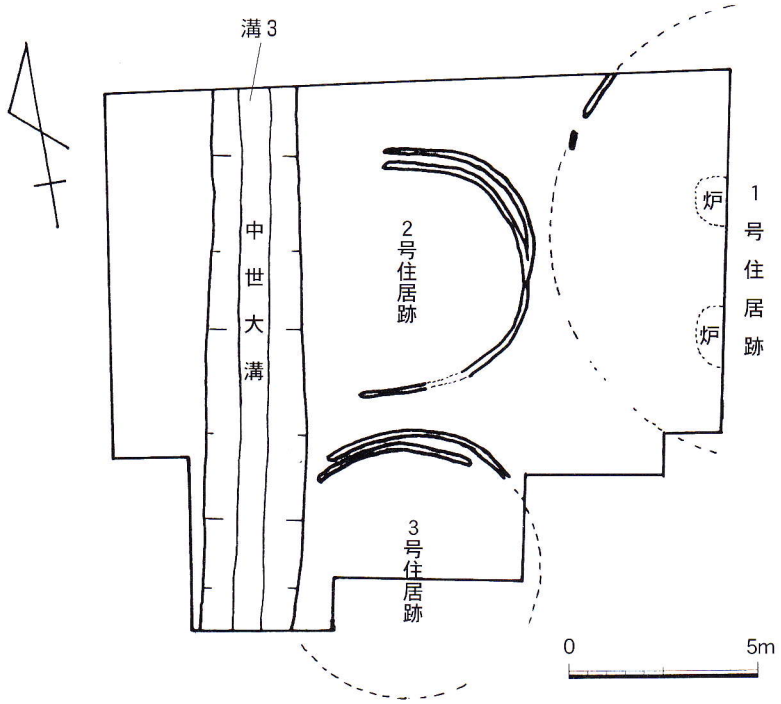
太田・黒田遺跡は、紀ノ川下流南岸の和歌山平野のほぼ中央部に位置し、平野部でも微高地にあたる地点に所在する。遺跡は南北約850 m、東西約500 mの範囲をもつ弥生時代から江戸時代にかけての大規模な複合遺跡である。昭和43（1968）年から発掘調査が開始され、現在までに61次数の調査が行われるまでに至っている。

第22次調査は、遺跡範囲のほぼ中央部にあたる和歌山市太田479- 3番地において社屋建設工事に伴って行ったもので、昭和63年4月から5月にかけて財団法人和歌山市文化体育振興事業団が面積210 ㎡について実施したものである。

調査の結果、弥生時代中期の竪穴住居3棟、古墳時代の柱穴8基、中世の大溝1条などを検出し、弥生時代から中世にかけての遺物が大量に出土した。特に、中世大溝は南北方向に掘削されたもので、幅1.5～2 m、深さ約70㎝、長さ17 m以上の規模を測り、両岸に杭を密に打ち込み護岸施設としている。出土した遺物の時期から16世紀後半に埋没したものと考えられている。




調査区位置図




遺構配置図

**出土遺物**

ここに報告する遺物は、中世の大溝（溝３）出土遺物のうち、遺構が機能していた時期と考えられる中世の遺物を報告する。

遺物は、瓦器、山茶椀、中世須恵器、中世土師器、土師質・瓦質土器、国産陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品、金属製品などがある。以下、種類別に分類して記述を行う。

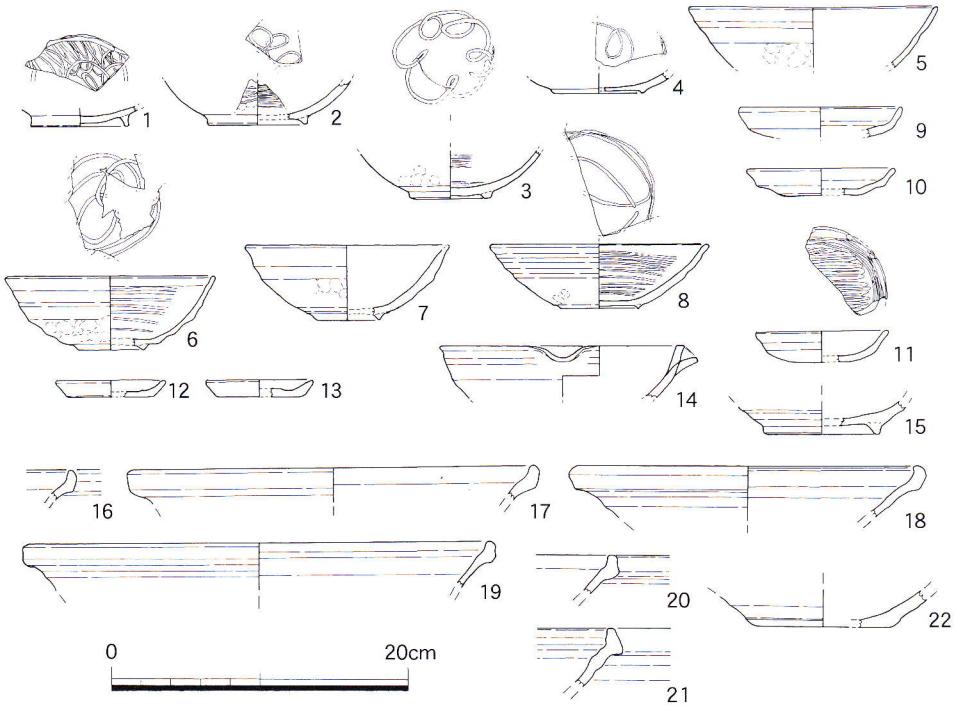
瓦器

瓦器は椀（１～８）、皿（９～13）、片口鉢（14）などがあり、胎土は砂粒をほとんど含まず緻密で、色調は黒灰色から淡灰色の範囲である。

椀は古い段階のものに大和型瓦器椀がみられるが、他は紀伊型瓦器碗が主体を占める。図示したものは全て紀伊型瓦器碗である。１は内底面に密な連結輪状文を施したもので、高台は高く、外側に開く。２についても内底面に密な連結輪状文を施したもので、外面にもヘラミガキがみられる。１に比べて高台が低いものである。３は内底面に５回転の連結輪状文を施したもので、高台は更に低くなっている。４も内底面に連結輪状文を施したものであるが、高台は断面形が逆三角形となり細く、更に低いものである。５～７は口縁外端部に２単位のヨコナデによる段がみられる。また、8については３単位の段を観察できる。これらの高台は断面形が逆三角形のものであり、外面にはミガキはみられない。

皿は、内面にヘラミガキがみられるもの（９～11）とみられないもの（12・13）がある。前者は口径約 11.2 ～ 8.8 ㎝、器高 2.1 ～ 1.8 ㎝の計測値の範囲で、後者は 2点とも口径 7.4 ㎝、器高 1.2 ㎝を測るものである。

片口鉢（14）は口径 16.9 ㎝、残存器高 6.6 ㎝を測るもので、内外面ともにヘラミガキによる銀化




遺物実測図 1 （瓦器、山茶椀、中世須恵器）

がみられる。

山茶椀

山茶椀は 1 点（15）が出土した。東海地方からの搬入品であり、和歌山平野の中世遺跡からはほとんど出土していない珍しいものである。胎土は砂粒を少量含むが緻密で、色調は淡灰色のものである。残存高 2.3 ㎝、高台径 7.9 ㎝を測る。内底面に重ね焼き痕がみられる。

中世須恵器

中世須恵器には東播磨地方から搬入された東播系須恵器がある。東播系須恵器は、こね鉢（16 ～ 22）が出土した。16 ～ 18 は口縁上端部をつまみ上げ、口縁外端面は丸味を帯びた縁帯状となっている。19・20 は口縁端部内側に段をもつもので、口縁外端面の縁帯中央部を押さえ窪ませている。21 は更に縁帯が発達したもので、縁帯幅約 2.0 ㎝を測る。これらの胎土は砂粒を少量含むが緻密なもので、色調は淡灰色から灰褐色の範囲である。22 は底部で、外底面には回転糸切り痕がみられる。

中世土師器

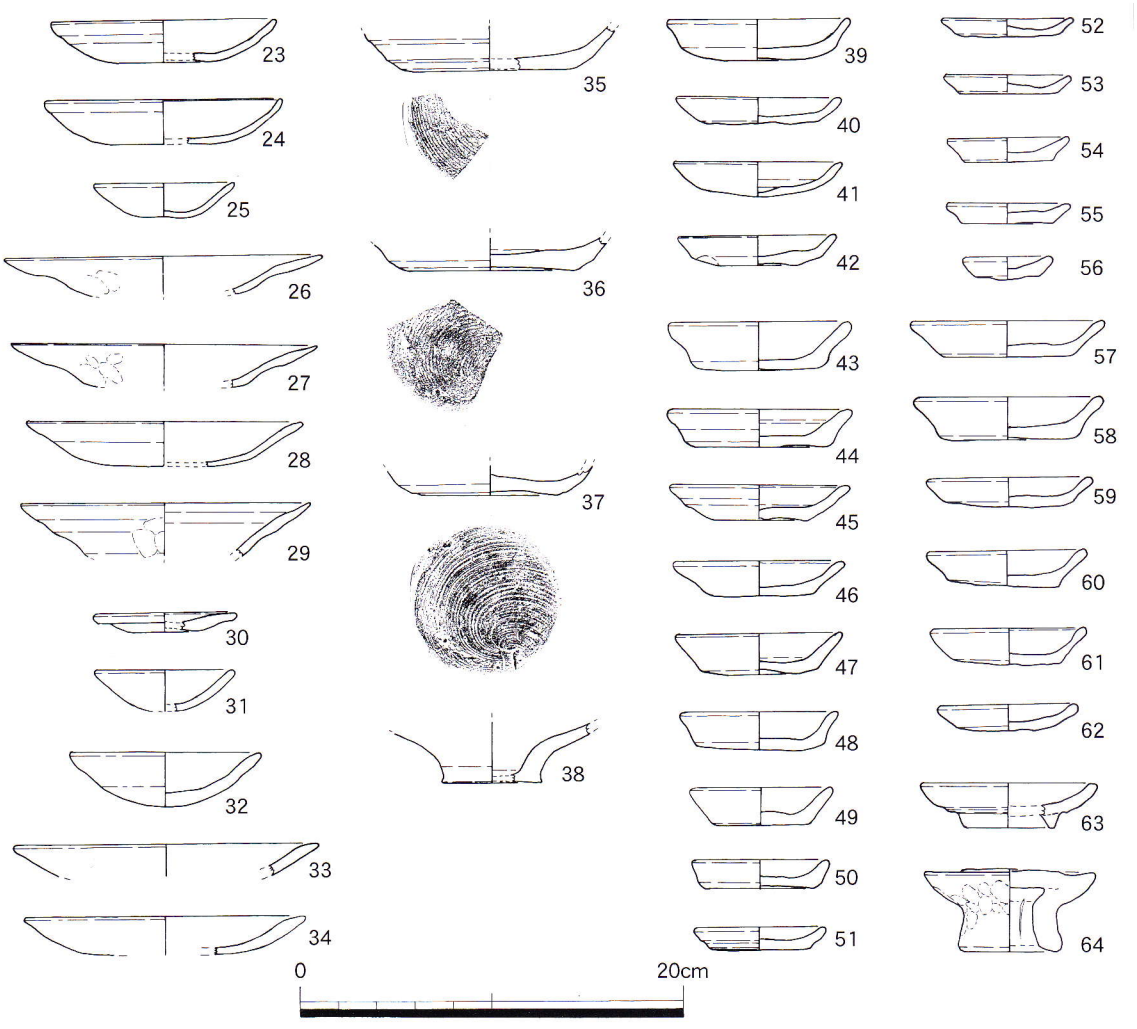
中世土師器には、皿と釜と堝がある。

皿には、いわゆる京都系土師器皿がみられる。京都から搬入されたとみられる乳白色系統のもの（23 ～ 29）と在地で模倣した（30 ～ 34）と考えられる灰黄～灰茶色のものがある。23 は京都系土師器皿 Ab タイプで、手づくね成形を行い、口縁部を緩やかに内湾させるものである。24・25 は京都系土師器皿 Ga タイプとみられるもので、24 は大皿、25 は小皿である。内型作りと考えられ、14 世紀中頃から後半の時期とされるものである。26 ～ 29 は京都系土師器皿 Ia タイプであり、手づくね成形を行い、口縁部を強く外反させる。これらは白土器と呼ばれる一群で、15 世紀代の時期とされる。30 は、いわゆる京都系土師器皿のうち退化した「て」の字状口縁皿を模倣したものとみられ

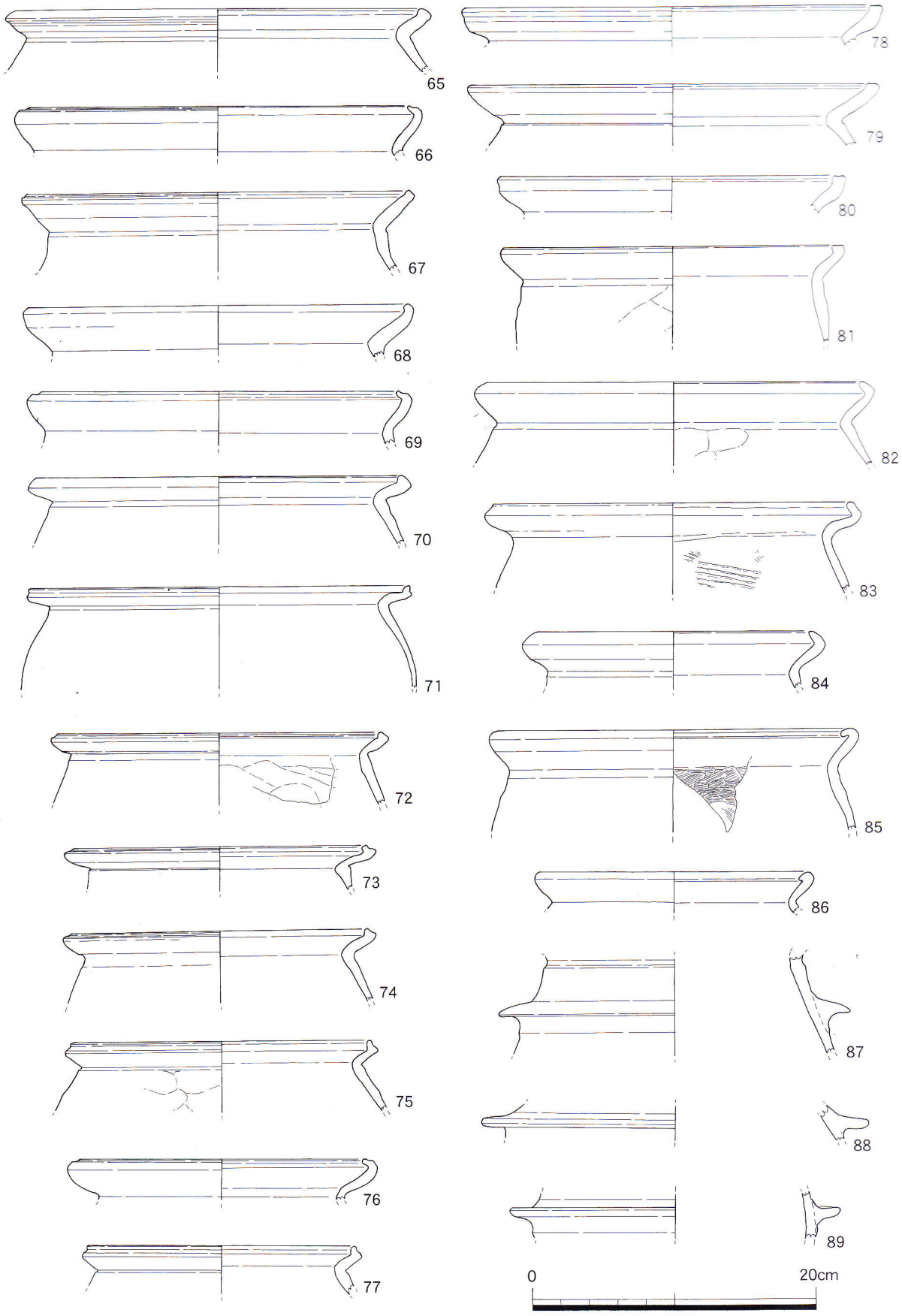
る。手づくね成形で、口縁部を短く丸くおさめている。31・32は京都系土師器皿Gaタイプを模倣したものとみられる。手づくね成形を行い、やや厚手の器壁をヨコナデで仕上げるものである。33・34は京都系土師器皿Iaタイプを模倣したものとみられる。31・32と同様に手づくね成形を行い、やや厚手の器壁をヨコナデで仕上げるものである。

また、皿には本遺跡周辺で製作されたものとして、回転台成形のもの（35～38）と手づくね成形のもの（39～62）がある。前者は底面に回転糸切痕を残す淡茶褐色のもので、底部径が8.4～7.0cm（(35～37）の一群と底部径が5.2cmと小さい、いわゆる円板状高台の38がある。手づくね成形のものには、瓦器皿と類似する一群（39～42）があり、12～13世紀代のものと考えられる。また、ナデ調整により、底部と体部側面に明瞭な稜をもつ一群（43～62）がある。これらは類似する胎土のもので、赤褐色から茶褐色の色調をもつもので、口縁端部を外方にやや外反させる一群（43～56）と口縁端部を玉縁状におさめる一群（57～62）に二分することができる。前者が量的に最も多いものであり、後者のタイプは根来寺遺跡で16世紀代に一般的にみられるものと類似する。

なお、土師器皿には高台付きのもの（63・64）もある。63は口径9.3cmを測る厚手の皿で断面形



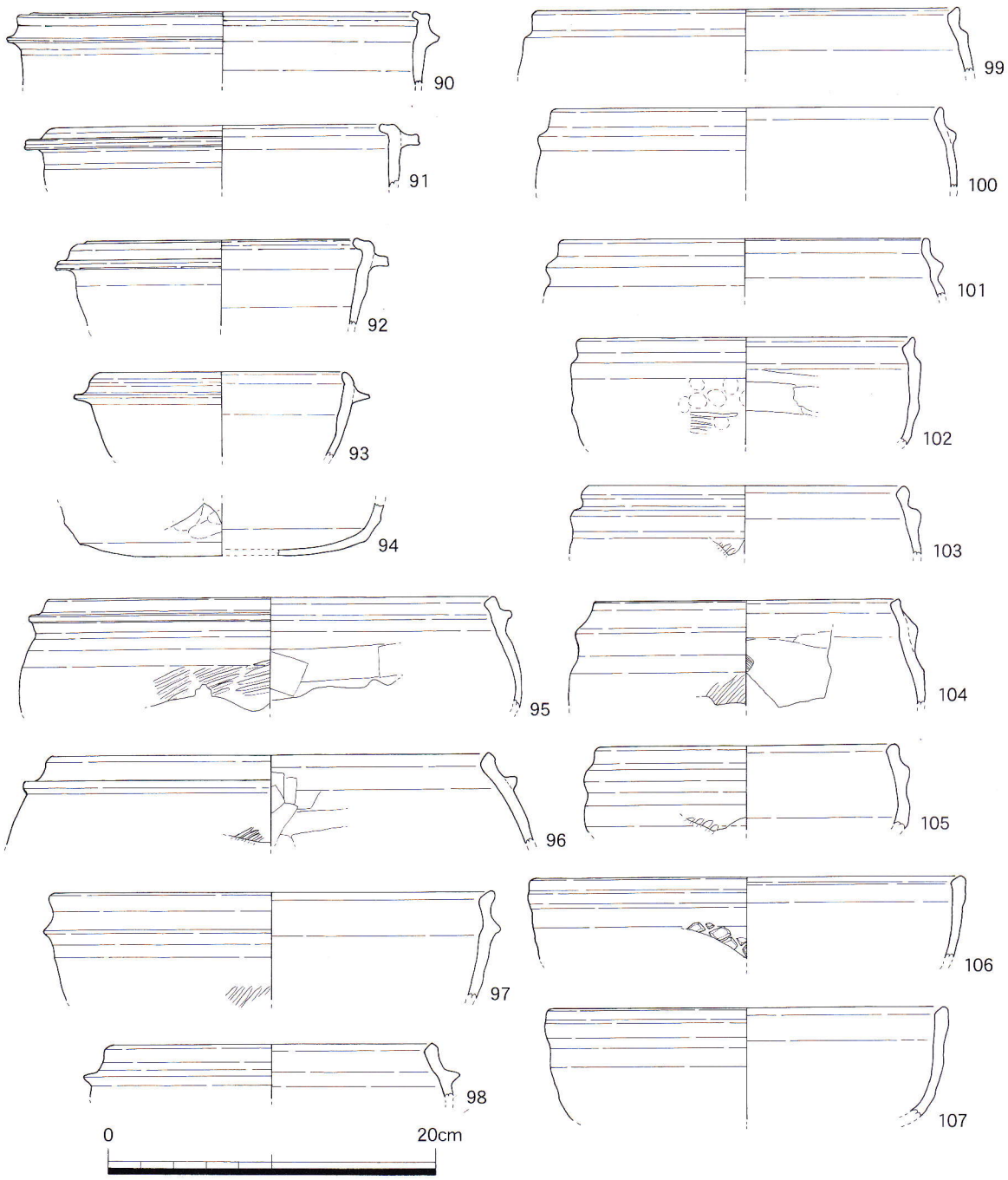

遺物実測図2（中世土師器1）




遺物実測図３（中世土師器２）

が逆三角形のしっかりした高台が貼り付けられている。茶褐色のもので、口縁端部上面が水平に面取りされている。64は手づくね成形によって、皿の底部に厚手の台を貼り付けるものであり、皿というより台と呼ぶべきかも知れないものである。外面の接合部に指頭圧痕を顕著に残し、台部の内側に絞り目がみられる。

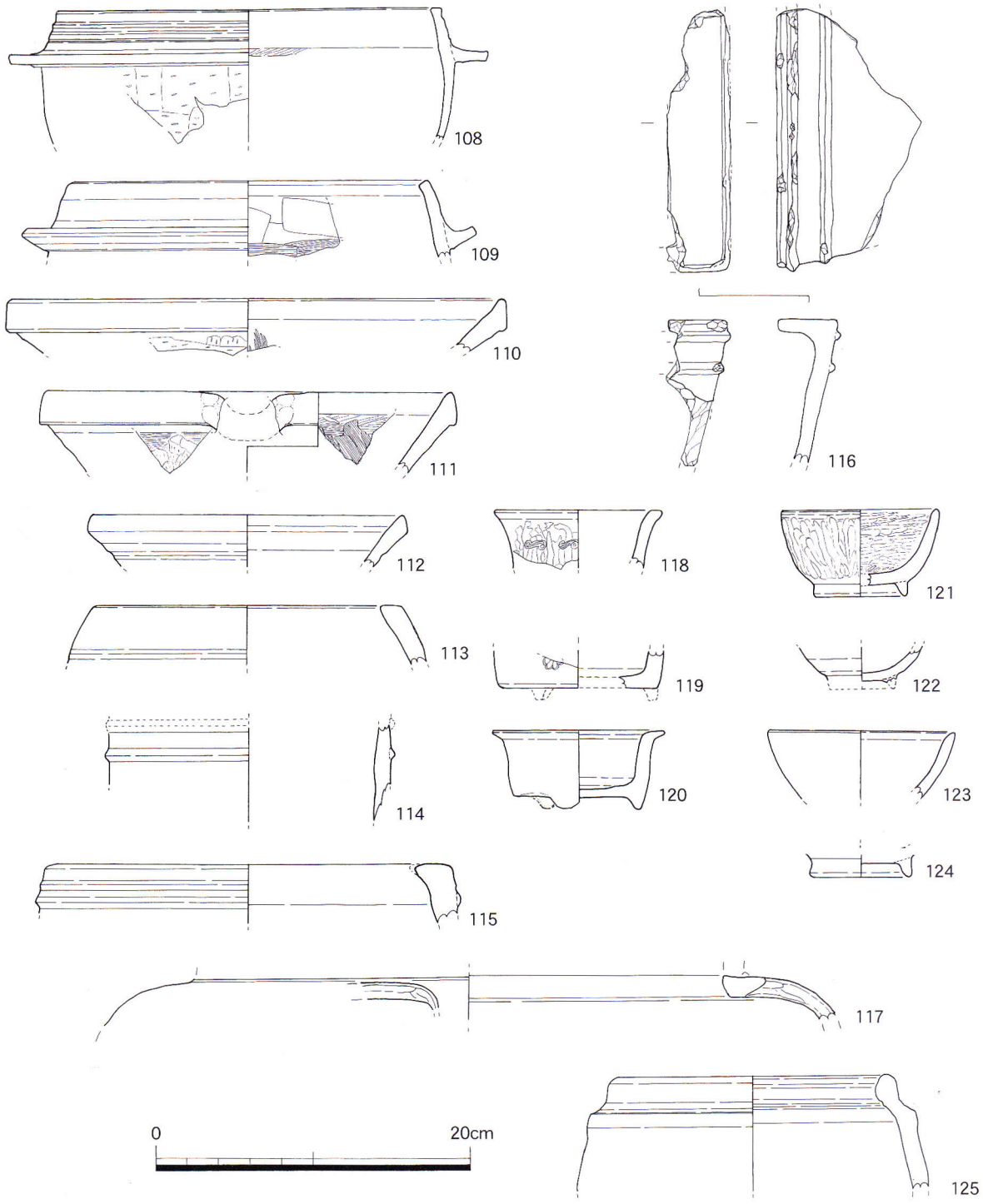
土師器釜（65～86）は、口縁部が「く」の字状に屈折するもので、口縁端部にバリエーションがみられる。外面体部に鍔あるいは突帯をもつものであるが、欠失したものもある。口縁端部の特徴から、端部を内傾させ小さく丸くおさめるもの（65～77）、端部を水平におさめるもの（78～81）、




遺物実測図４（中世土師器３）

端部を内傾させ長く伸ばしたままのもの（82 ～ 84）、更に内側に巻き込むもの（85・86）がある。これらは胎土中に結晶片岩が含まれることや色調が赤褐色から茶褐色の範囲で共通しており、本遺跡周辺で製作されたものと考えられる。土師器釜の鍔部（87 ～ 89）も出土している。

土師器堝（90 ～ 107）は、口縁端部が内傾し、外面体部をケズリ成形で仕上げ、口縁部外面に短い鍔をもつもの（90 ～ 94）、口縁端部の内側に面をもち、外面体部下半部を平行状のタタキ成形を




遺物実測図５（土師質・瓦質土器）

行い、口縁部外面に突帯をもつもの（95 ～ 98）、突帯が退化して突起状となったもの（99 ～ 105）、体部が直立し、外面体部を格子状のタタキ成形を行ったもの（106・107）がある。90 ～ 94 は胎土中に結晶片岩が含まれることや色調が赤褐色から茶褐色の範囲で共通しており、本遺跡周辺で製作されたものとみられる。また、他の外面体部にタタキ成形を施す堝は、他地域からの搬入品と考えられる。

土師質・瓦質土器

土師質土器と瓦質土器には同一器種で焼成が土師質のものと瓦質のものがあることから、土師質・瓦質土器と一括する。本来的には和泉・大和地域から瓦質土器が搬入された後、それを模倣して本遺跡周辺で土師質・瓦質土器が製作されたものと考えられる。羽釜（108・109）、擂鉢（110 ～ 112）、火鉢（113 ～ 116）、風炉（117）、香炉（118 ～ 120）、椀（121 ～ 123）、皿（124）、土管（125）などの器種が認められる。

羽釜は、瓦質焼成のもの（108）と土師質焼成のもの（109）がある。108 は色調が黒灰色のもので、和泉地方からの搬入品であると考えられる。109 は色調が赤褐色のもので、胎土中に結晶片岩が含まれることから本遺跡周辺で製作されたものとみられる。

擂鉢（110 ～ 112）は瓦質焼成で、外面体部はケズリ調整、内面はハケ調整を施した後にクシ状工具で擂り目を施し、色調は淡灰～灰褐色の範囲である。口縁端部の外側に面取りを行い縁帯状に仕上げるもので、古相のものは縁帯幅が狭く、新相になるほど縁帯幅が広くなる傾向がある。

火鉢は瓦質焼成のもの（113・114・116）と土師質焼成のもの（115）がある。円形（113 ～ 115）と方形（116）のものがあり、外面に突帯を貼り付け、外面はミガキ調整、内面はナデ調整を施すなど製作技法は共通している。115 は土師質焼成により色調は茶褐色のものであるが、胎土中に結晶片岩が含まれることから本遺跡周辺で製作されたものと考えられる。

風炉（117）は小破片であるが、瓦質焼成で黒灰色の色調をもつ大型の風炉である。火窓の側縁面はケズリ調整がみられる。

香炉は瓦質焼成のもの（118・119）と土師質焼成のもの（120）がある。口縁端部を外反させるもので、三足をもつ円形の小型香炉である。外面はミガキ調整、内面はナデ調整を施すなど製作技法は共通している。瓦質焼成の 118 は唐草状、119 は菊花文のスタンプがみられる。120 は土師質焼成により赤褐色の色調で、胎土中に結晶片岩が含まれることから本遺跡周辺で製作されたものと考えられる。

椀は瓦質焼成のもの（121）と土師質焼成のもの（122・123）があり、皿（124）は瓦質焼成である。これらのものは、貼りつけ高台をもち、内外面を丁寧にミガキ調整を施すなど製作技法は共通している。122・123 は土師質焼成により淡赤褐～茶褐色の色調であるが、123 は表面に漆を塗布し光沢のある黒褐色の色調である。これらの一群は仏具の六器などをモデルに製作した可能性がある。

125 は土管の受口とみられるもので、土師質焼成により淡赤茶色の色調である。胎土中に結晶片岩が含まれることから本遺跡周辺で製作されたものと考えられる。

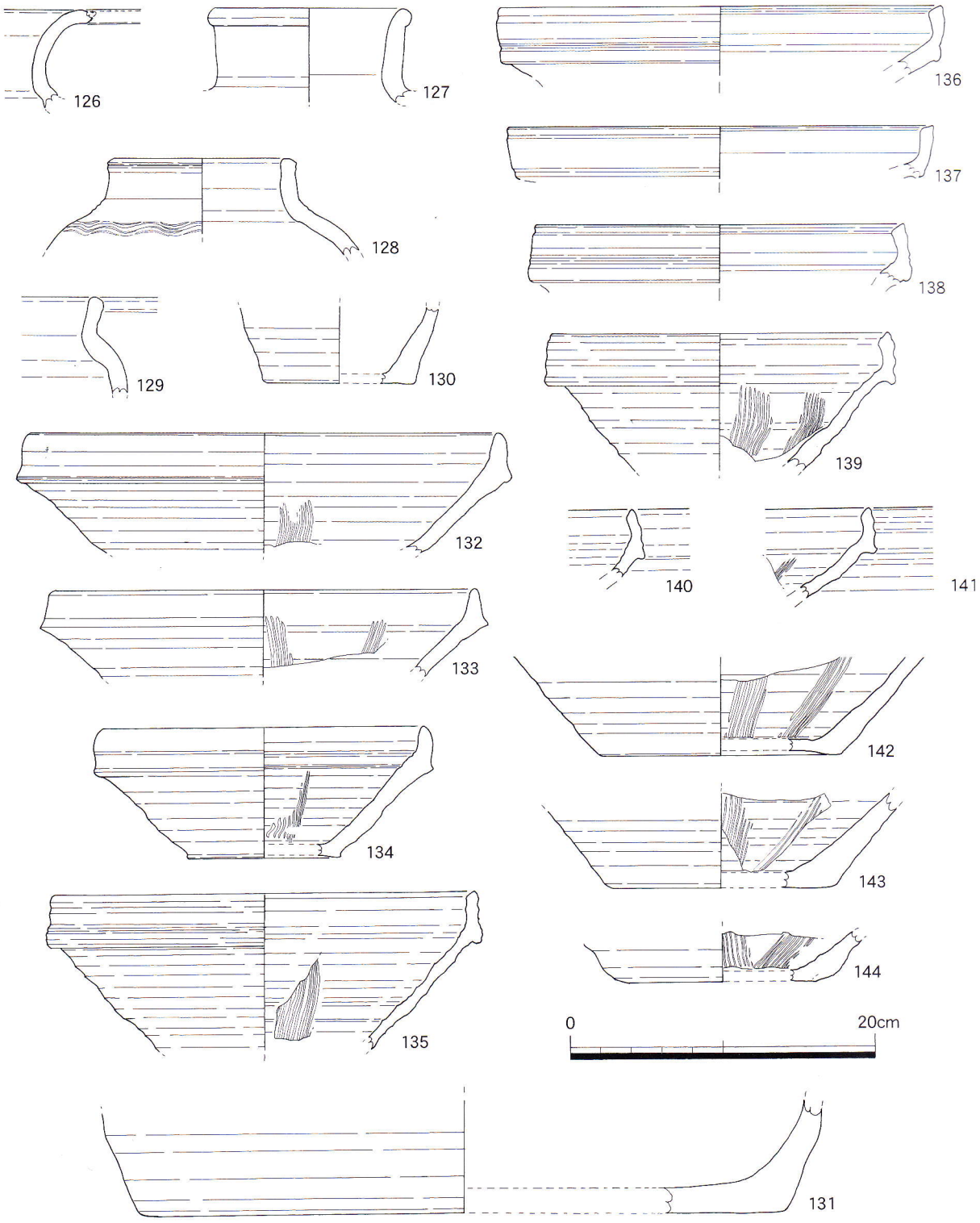
国産陶器

焼締陶器は常滑焼（126）、信楽焼（127）、備前焼（128 ～ 144）があり、施釉陶器には瀬戸・美濃系陶器（145 ～ 157）がある。

常滑焼は大甕（126）がある。口縁端部を外反させるもので、外面端部に面取りを行っている。色調は黒灰色で、12 世紀後半頃とされるものである

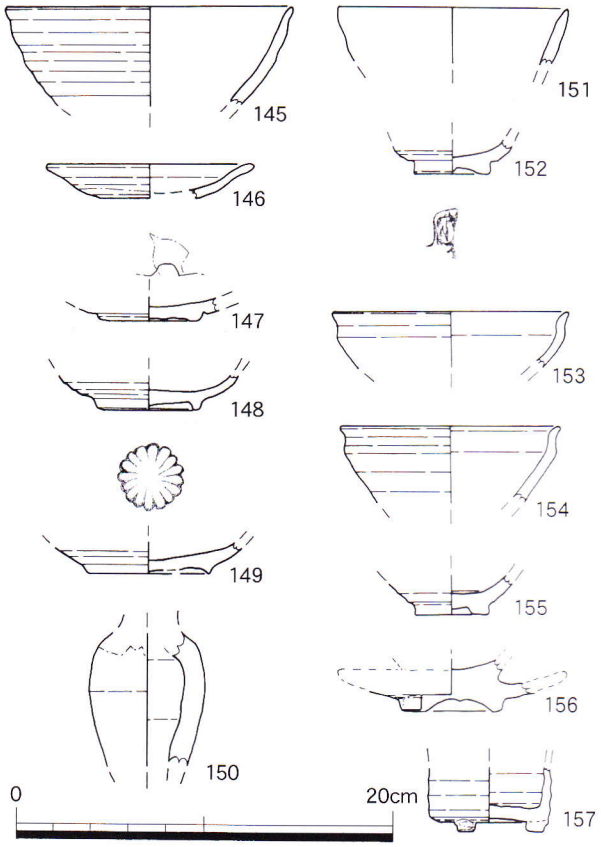
信楽焼は中型の壺（127）がある。色調は淡茶色のもので、胎土に長石粒が多くみられる。

備前焼は壺（128 ～ 130）、大甕（131）、擂鉢（132 ～ 144）があり、特に擂鉢が大量に出土してい




遺物実測図 6 （国産陶器 1）

る。128・129は肩部に波状文をクシ状工具で施した中型の壺で、130は小型の壺底部である。131は大甕底部で、色調は暗赤褐色の堅牢なものである。擂鉢はⅣ期のものが132～134である。口縁端部を上方につまみ上げ端部外面に縁帯面を作り出すものである。内底面にクシ状工具で擂目を施すもので、クシの条線数は5～8を数える。色調について、132・133は暗茶褐色、134が暗赤褐色である。Ⅴ期のものは135～144で擂鉢の量的主体を占める。口縁部の縁帯は前者に比べ拡張され、縁帯面に沈線状の段がみられる。擂目の条線数は 8～11である。色調は暗赤褐色が主体を占める。




遺物実測図7（国産陶器2）

瀬戸・美濃系陶器は灰釉を施したもの（145～150）と鉄釉のもの（151～157）がある。灰釉のものは、椀（145）、皿（146～149）瓶子（150）がある。145～147は古瀬戸後期様式のもので、外面体部下半への釉は施さないタイプである。148・149は大窯期のもので、全体に施釉し高台内に重ね焼き時の窯道具痕がみられるものである。149の内底面には菊花文のスタンプがみられる。150は灰釉瓶子で、二次焼成により淡緑白色に変色している。穴窯期のものと考えられる。鉄釉のものは、天目茶椀（151～155）、天目台（156）、香炉（157）がある。天目茶椀の色調は全て黒褐色で、151・152は古瀬戸後期様式、153～155は大窯期のものである。152の高台内に花押状の墨書がみられる。156の天目台は黒釉を施す古瀬戸後期様式のもので、高台周囲には釉を掛けないタイプである。瀬戸・美濃系天目台の出土は珍しい。157は暗茶色の色調の小型三足香炉で、大窯期のなかでも16世紀後半のものとされる。

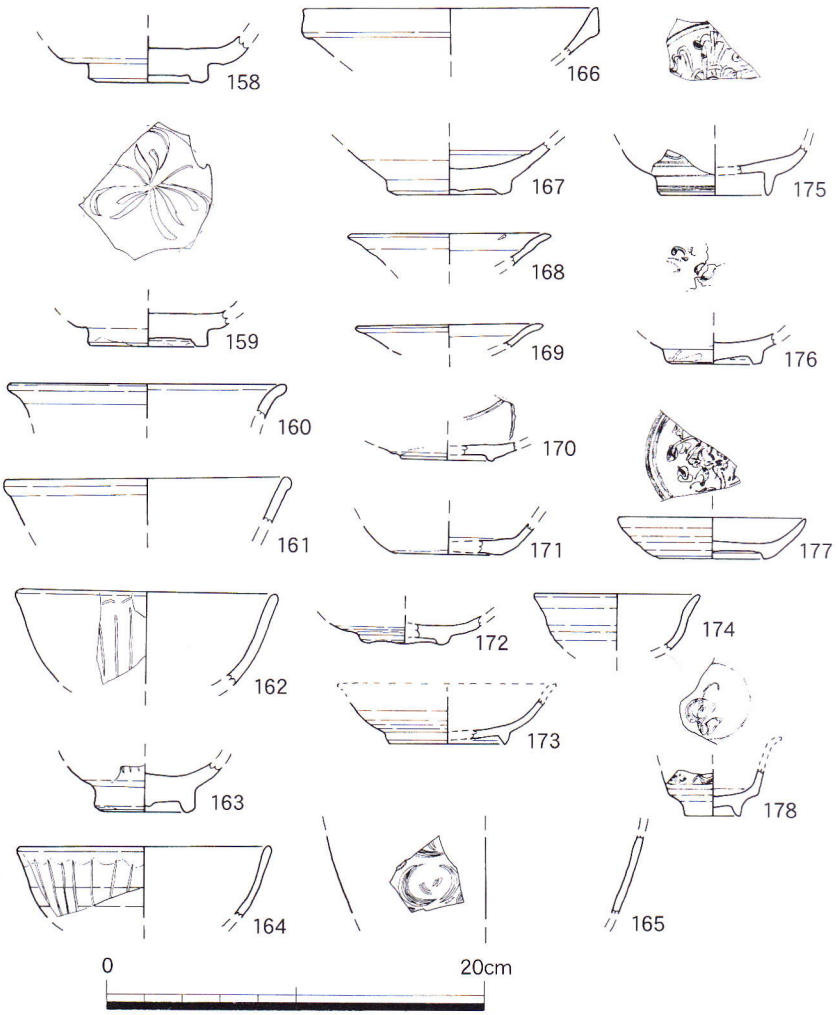
輸入陶磁器

中国製の青磁（158～164）、青白磁（165）、白磁（166～174）、染付（175～178）がある。

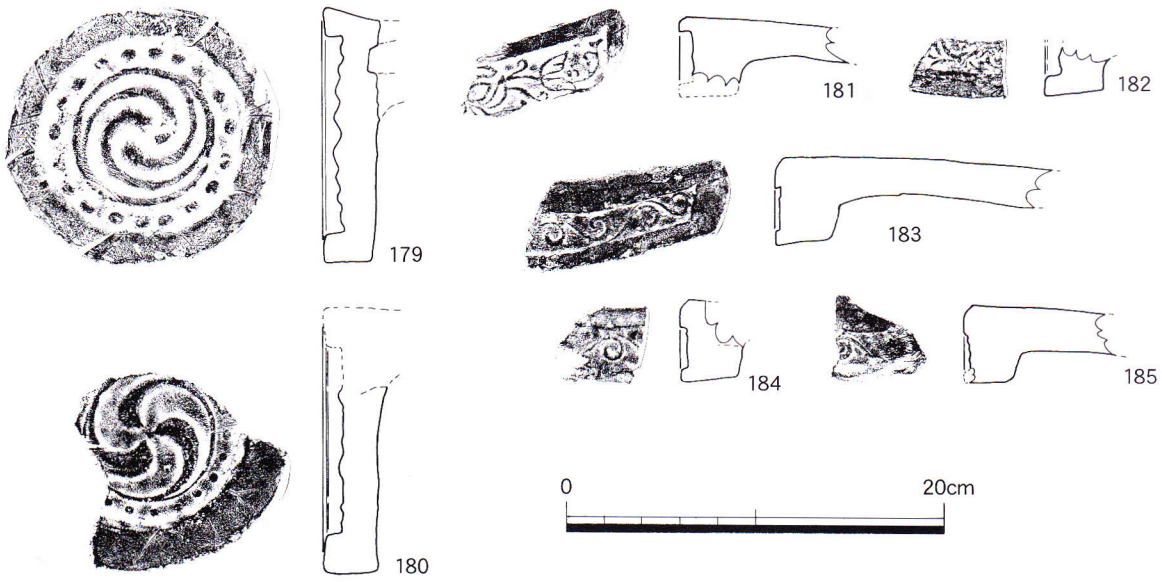
青磁は碗があり、龍泉窯系（158～163）と華南系（164）のものがある。158・159は太宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、159の内底面には片切彫りの蓮華文が施されている。160は口縁端部を外反させるタイプである。161は口縁端部を玉縁状としている。162・163は線描蓮弁文の碗である。164は前2例と同じ文様構成であるが、外面体部に回転ヘラケズリ痕を明瞭に残すもので、釉薬の透明度は低い。165は青白磁梅瓶である。薄い器壁をもつもので、外面体部に渦文をクシ状工具で施すものである。

白磁は碗（166・167）、皿（168～173）、小杯（174）がある。166・167はいわゆる玉縁口縁碗で

ある。透明度の高い釉薬が施されるが、外面体部下半への釉は施さないタイプである。168～170は前者の時期に伴う皿である。内面に圏線状に段をもち、口縁端部を外反させるものである。171はいわゆる口禿皿で、底部には釉を施さないタイプである。172は割高台皿で15世紀代にみられるタイプである。173は細い高台をもち、口縁端部を外反させるもので、16世紀に大量にみられるタイプである。174は外面体部にヘラケズリ痕を明瞭に残す小杯で、172とセットとなるものである。

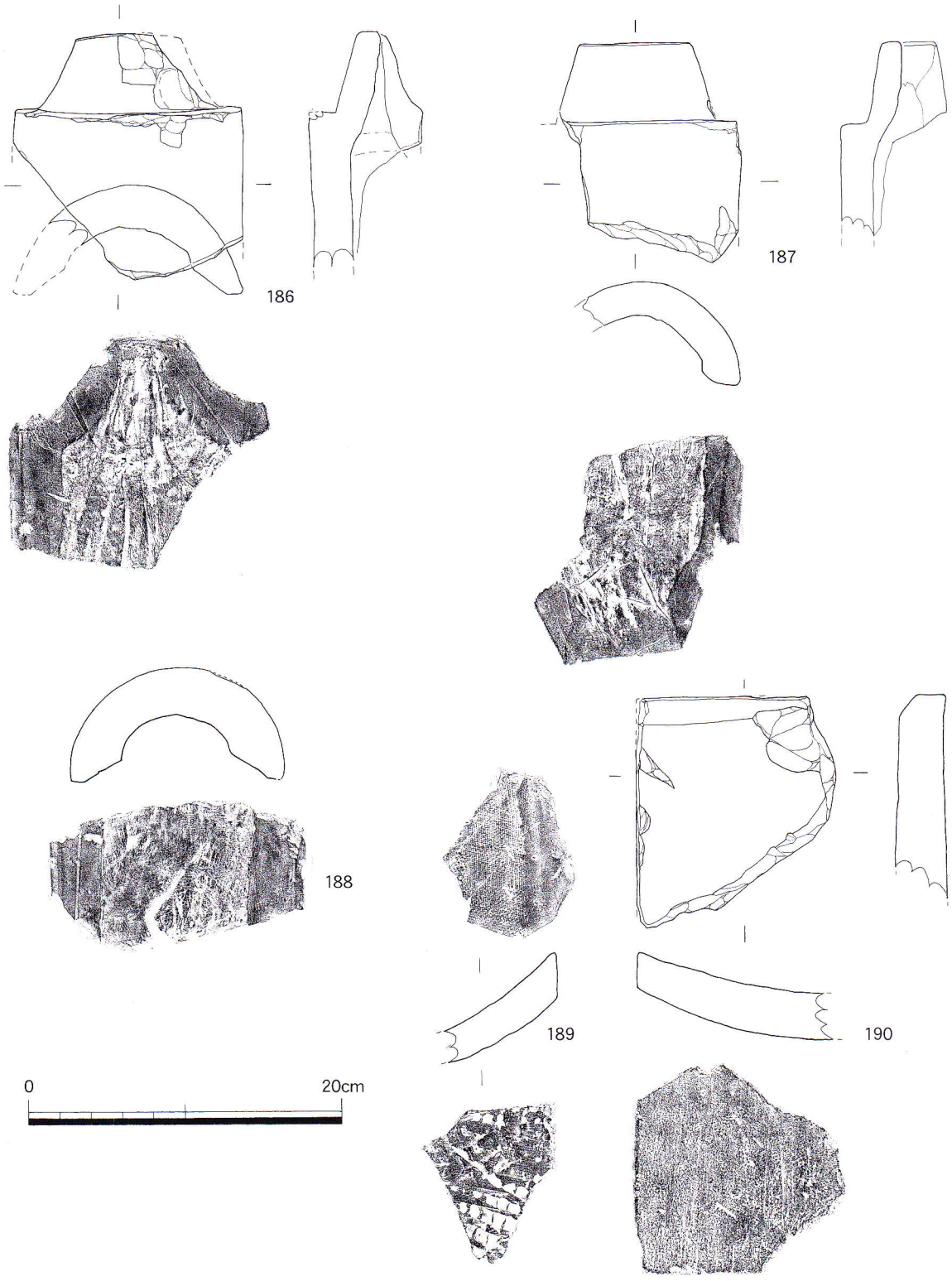



遺物実測図８（輸入陶磁器）




遺物実測図９（瓦１）

染付は碗（175・176）、皿（177）、小杯（178）がある。175・177・178は景徳鎮窯系で、176は漳州窯系のものである。175は内底面に呉須顔料で十字花文を描いた碗で、176は高台周囲に釉を施さないタイプである。177はいわゆる碁笥底皿で、内底面に牡丹文を描いている。178は腰折れの小杯

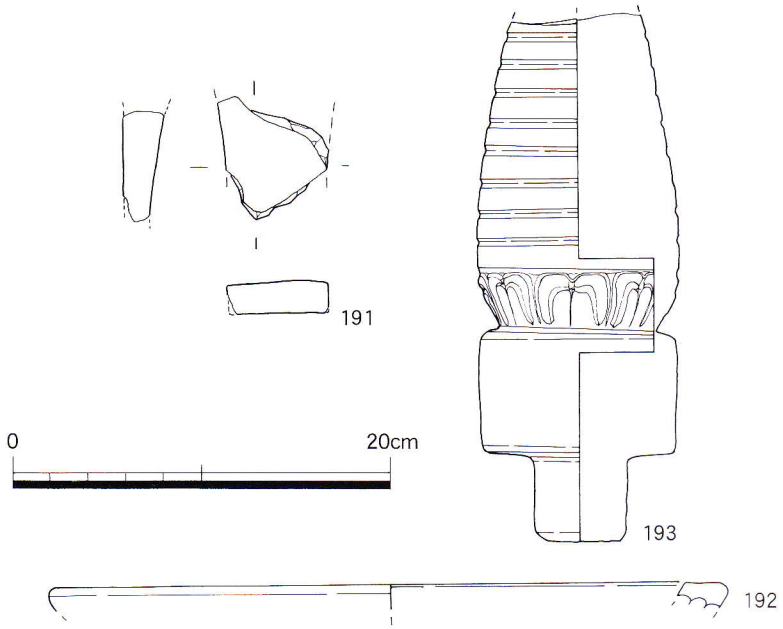



遺物実測図 10（瓦 2）

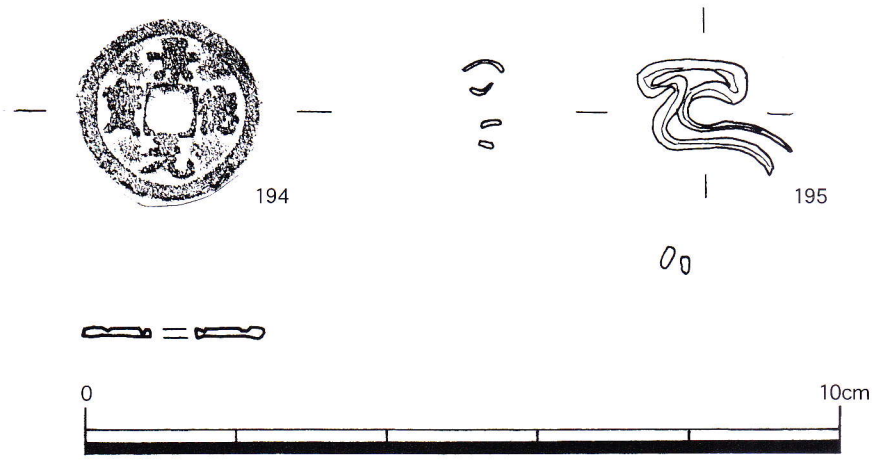
で、内底面に梅月文を描くものである。

瓦

瓦は軒丸瓦(179・180)、軒平瓦(181 ～ 185)、丸瓦(186 ～ 188)、平瓦 (189・190) がある。軒丸瓦は、179 と 180 のどちらも内区が深いもので、179 は左巻き、180 は右巻きの巴文を瓦当文様にしている。179 は珠文数が 19 で巴文の尾部が長く伸び、接している。180 は小さい珠文をもつもので、太い巴の頭部が中央で接し、尾部でも互いに接している。軒平瓦は、181・182 は内区が深く、周縁部の幅が狭いもので、瓦当文様は唐草文が施されている。183 ～ 185 は内区が浅いもので、瓦当文様は均整唐草文である。これらはケズリとナデにより調整されており、181 の凹面には離れ砂が付着している。また、185 には二次焼成による変色部分がみられる。丸瓦 (186 ～ 188) は、凹面に布目、凸面には縄目タタキがみられナデ調整で仕上げるものである。平瓦は、189 は凹面に布目、凸面に格子タタキがみられ、190 は凹面に離れ砂、凸面に板状のタタキがみられる。




遺物実測図 11 (石製品、石造物)




遺物実測図 12 (金属製品)

石製品・石造物

石製品には、砥石 (191) と茶臼 (192) がある。191 は乳白色のもので、石材の種類は不明であるが、表面に径 1 ～ 2 ㎜ 大の孔がやや多くみられる。上下の 2 面を用いたものとみられ、平滑面となっている。192 は茶臼の下臼受皿の周縁部分である。石材には砂岩を用いたものである。

石造物には宝篋印塔の相輪 (193) がある。下から伏鉢、請花、九輪の各部分があり、上部を欠失している。石材には砂岩を用いたものである。

金属製品

金属製品には銭貨（194）と銅製金具（195）がある。194は中国北宋の銅銭「景徳元寶」である。195は銅製の金具であるが、用途は不明である。留め金具の可能性がある。

## まとめ

以上、大溝（溝３）出土の中世遺物を報告したが、その中でも特に中世後期の時期のものが本遺構に伴うものと判断され、本遺跡が所持していた中世後期（太田城跡）の遺物の一端を報告することができた。

なお、本遺構からは、これらのもの以外に弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器なども多量に出土しており、遺物の種類が多岐にわたる。このことは埋没時に周辺の各時代の遺構に所属していた遺物が多く混入したことを示すものと考えられる。

（北野）

【参考文献】

『太田・黒田遺跡発掘調査現地説明会資料』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1988 年

大野左千夫「太田・黒田遺跡第 22 次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 1 —昭和 63（1988）・平成元（1989）年度—』財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1992 年

# Ⅳ．普及啓発活動

## 1．書籍刊行

埋蔵文化財の発掘調査報告書を刊行し、関係機関等へ配布した。

『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 —平成16年度（2004年度）—』（平成19年3月）

発掘調査報告書の編集を行った。

『和歌山市内遺跡発掘調査概報 —平成17年度—』（平成19年3月） 和歌山市教育委員会発行

## 2．報告会等の開催

発掘調査報告会を実施した。

『スライドで見る太田・黒田遺跡発掘情報』

平成18年7月9日　中央コミュニティーセンター

## 3．講師派遣等

財団法人和歌山県文化財センター主催の報告会に講師を派遣した。

『地宝のひびき　—第1回和歌山県埋蔵文化財報告会—』

平成18年6月3日　和歌山県立図書館　メディア・アートホール

派遣職員　藤薮勝則「井辺遺跡の発掘調査」

財団法人和歌山県文化財センター主催展示会の文化財講座に講師を派遣した。

展示会『平安京と紀伊　—平安時代から室町時代の土器—』

平成18年12月9日　きのくに歴史探訪館

派遣職員　北野隆亮「紀伊の土器」

和歌山市教育委員会
文化振興室
受付

平成21年３月19日

# 和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報

— 平成18年度（2006年度）—

編集・発行　財団法人 和歌山市都市整備公社
和歌山市西汀丁36番地
印　　刷　株式会社 ウイング

© 財団法人 和歌山市都市整備公社